
行田市

馬場裏遺跡

県立行田進修館高等学校関係埋蔵文化財発掘調査報告

— I —

1999

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



馬場裏遺跡調査区全景



平安時代の瓦堂



縄文時代後期の深鉢形土器



縄文土器出土状況

序

埼玉県では、阪神・淡路大震災以来、大規模地震対策を推進するとともに、地震災害対策の強化を行ってまいりました。これらの対策の一環として、災害時に避難所となる県立高等学校の防災機能の向上が積極的に進められております。

この施策の実施計画に基づき、県内に38校の防災活動の拠点校が指定され、その一つとして県立行田進修館高等学校では防災機能を併せ持つ体育館を建設することになりました。

県立行田進修館高等学校の周辺は、行田市域では数少ない縄文時代の遺跡として知られる馬場裏遺跡が存在しております。これまでも数次にわたって発掘調査が実施されており、縄文時代から平安時代に至る大規模な集落跡が広がっていることが明らかになってきました。

この事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いにつきましては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることになりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県教育局管理部財務課の委託を受け、発掘調査を実施いたしました。

今回の馬場裏遺跡の発掘調査では、平安時代の住居跡や中世の井戸、溝など多くの貴重な埋蔵文化財が発見されました。特に、溝から出土した平安時代の瓦堂

は、当時の仏教信仰の実態を考えていく上で、大変重要なものであります。

瓦堂は、木造建築の金堂を模して造られた瓦製の堂宇で、瓦塔とともに奈良時代末から平安時代にかけて各地で盛んに製作されました。今回の発見は、人々の信仰の対象として瓦塔や瓦堂などを安置した「仏堂」的な施設が存在していた可能性を示唆するものとして、古代における仏教信仰のひろがりを示す貴重な資料といえます。

これらの成果をまとめた本書が、埋蔵文化財保護の基礎資料として、また、学術研究や教育・普及の資料として広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多大な御指導・御協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、同管理部財務課、県立行田進修館高等学校をはじめ、行田市教育委員会ならびに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成10年12月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井 桂

例言

1. 本書は、埼玉県行田市に所在する馬場裏遺跡（22次調査）の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

馬場裏遺跡（BBUR）
行田市長野1320番地他
平成9年8月13日付け 教文第2—100号
3. 発掘調査は、県立行田進修館高等学校体育館改築工事に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県教育局管理部財務課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。なお、学校名が平成10年度に県立行田高等学校から県立行田進修館高等学校に変更されている。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、小野美代子、伴瀬宗一、末木啓介が担当し、平成9年8月1日から平成9年10月31日まで実施した。整理報告書作成事業は大谷徹が担当し、平成10年9月1日から平成10年12月31日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量及び航空写真撮影は、アスコエンジニアリング株式会社に、遺物の巻頭カラー写真は小川忠博氏に委託した。
6. 発掘調査時の遺構写真撮影は、小野、伴瀬、末木が行い、遺物の写真撮影は大屋道則と大谷が行った。
7. 出土品の整理及び図版の作成は、石器を西井幸雄、その他は大谷が行った。
8. 本書の執筆は、I—1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、それ以外は大谷が行った。
9. 本書の編集は、大谷があたった。
10. 本書にかかる資料は平成11年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。
11. 本書の作成にあたり、下記の方々より御教示、御協力を賜った。記して謝意を表します。（敬称略）
池田敏宏、石川安司、岡田賢治、門脇伸一、栗原文蔵、斎藤国夫、高崎光司、高橋好信、塚田良道、中島洋一、山崎 武
行田市教育委員会

凡例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系(原点：北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位指示は、すべて座標北をあらわす。
2. グリッドは10×10m方眼を設定した。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。
3. 全体図等に記した遺構の略号は以下のとおりである。

SJ=竪穴住居跡 SD=溝 SE=井戸

SK=土壌 ST=火葬跡

4. 挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構図

竪穴住居跡・火葬跡・井戸・土壌…1/60

溝…1/200

溝土層断面図…1/60

ピット…1/120

遺物

縄文土器…1/4

縄文土器拓影・石器…1/3

土師器・須恵器・陶磁器・瓦…1/4

土製品・石製品・金属器…1/3

板石塔婆…1/6

その他のものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度表記して示している。

5. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を示しており、単位はmである。
6. 遺物観察表の記載は次のとおりである。

法量の()付き数値は推定値を表し、単位はcmである。

胎土は肉眼で観察される範囲の混入物を記載した。

A…石英、B…白色粒子、C…白色針状物質、D…長石、E…角閃石、F…赤色粒子、G…黒色粒子、H…雲母、I…片岩、J…砂粒である。

焼成はA良好、B普通、C不良の3ランクに分けた。

残存率は各部位に対するおおよその数値で、厳密なものではない。

7. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の1/50000の地形図を使用した。

目次

口絵	(2) 遺構外出土遺物	11
序	2. 奈良・平安時代	15
例言	(1) 概要	15
凡例	(2) 竪穴住居跡	15
目次	3. 中世・近世	20
I 発掘調査の概要	(1) 火葬跡	20
1. 発掘調査に至る経過	(2) 溝	21
2. 発掘調査・報告書作成の経過	(3) 井戸	29
(1) 発掘調査	(4) 土壌	34
(2) 整理・報告書作成	(5) ピット群	38
3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	4. その他の遺物	45
II 遺跡の立地と環境	V 調査のまとめ	46
III 遺跡の概要	1. 瓦堂について	46
IV 遺構と遺物	2. 北武蔵出土瓦塔の様相	49
1. 縄文時代	附編 埼玉県内出土瓦塔地名表	51
(1) 単独出土土器		

挿図目次

第1図	埼玉県の地形図	4	第26図	ピット (1)	38
第2図	周辺の遺跡分布図	5	第27図	ピット (2)	39
第3図	馬場裏遺跡調査区位置図	8	第28図	ピット (3)	40
第4図	全体図 (22次調査)	10	第29図	ピット (4)	41
第5図	D-4 グリッド出土縄文土器	11	第30図	ピットの規模	44
第6図	遺構外出土の縄文時代遺物 (1)	12	第31図	グリッド出土遺物	45
第7図	遺構外出土の縄文時代遺物 (2)	13	第32図	瓦堂の諸例	47
第8図	第1号住居跡	15	第33図	埼玉県の瓦塔 (1)	54
第9図	第1号住居跡出土遺物	16	第34図	埼玉県の瓦塔 (2)	55
第10図	第2号住居跡・出土遺物	17	第35図	埼玉県の瓦塔 (3)	56
第11図	第3号住居跡・出土遺物	18	第36図	埼玉県の瓦塔 (4)	57
第12図	第4・5号住居跡	19	第37図	埼玉県の瓦塔 (5)	58・59
第13図	第1・2号火葬跡	20	第38図	埼玉県の瓦塔 (6)	60
第14図	溝 (1)	22・23	第39図	埼玉県の瓦塔 (7)	61
第15図	溝 (2)	24	第40図	埼玉県の瓦塔 (8)	62
第16図	溝 (3)	25	第41図	埼玉県の瓦塔 (9)	63
第17図	第1号溝出土遺物	27	第42図	埼玉県の瓦塔 (10)	64
第18図	溝出土遺物 (1)	28	第43図	埼玉県の瓦塔 (11)	65
第19図	溝出土遺物 (2)	29	第44図	埼玉県の瓦塔 (12)	66
第20図	井戸	30	第45図	埼玉県の瓦塔 (13)	67
第21図	井戸出土遺物 (1)	32	第46図	埼玉県の瓦塔 (14)	68・69
第22図	井戸出土遺物 (2)	33	第47図	埼玉県の瓦塔 (15)	70
第23図	土壇 (1)	35	第48図	埼玉県の瓦塔 (16)	71
第24図	土壇 (2)	36	第49図	埼玉県の瓦塔 (17)	72
第25図	土壇・ピット出土遺物	37			

表目次

第1表	第1号住居跡遺物観察表	16	第6表	井戸遺物観察表	33
第2表	第2号住居跡遺物観察表	17	第7表	土壇・ピット遺物観察表	37
第3表	第3号住居跡遺物観察表	18	第8表	土壇一覧表	37
第4表	第1号溝遺物観察表	27	第9表	ピット一覧表	42・43・44
第5表	溝遺物観察表	29	第10表	グリッド遺物観察表	45

図版目次

- 図版1 調査区遠景
調査区全景
- 図版2 南側調査区（西半部）
南側調査区（東半部）
- 図版3 縄文土器出土状況（D-4グリッド）
- 図版4 第1号住居跡
第1号住居跡遺物出土状況
第2号住居跡
- 図版5 第3号住居跡
第4号住居跡
第5号住居跡
- 図版6 第1号火葬跡
第2号火葬跡
第2号火葬跡土層断面
- 図版7 第1～4号溝（東から）
第1・2・4号溝（西から）
- 図版8 第1・4・9号溝（北から）
第7・8号溝（北東から）
- 図版9 第5・6号溝（北から）
第14号溝（南から）
- 図版10 第1号井戸 第2号井戸 第3号井戸
第4号井戸 第5号井戸 第6号井戸
第1号土壇 第2号土壇
- 図版11 第3号土壇 第4・5号土壇 第6号土壇
第7号土壇 第8号土壇 第10号土壇
第11号土壇 第12号土壇
- 図版12 ピット群（B-3・4グリッド周辺）
ピット群（C-3グリッド周辺）
- 図版13 ピット群（D-3・4グリッド周辺）
ピット群（F-4・5グリッド周辺）
- 図版14 単独出土縄文土器（第5図1）
遺構外出土縄文土器（1）（第6図）
- 図版15 遺構外出土縄文土器（2）（第7図）
遺構外出土石器（第7図64・65・66）
- 図版16 第1号住居跡（第9図1）
第1号住居跡（第9図2）
第1号溝出土瓦堂（第17図1）
- 図版17 第2号井戸出土軒丸瓦（第22図2）
第2号井戸出土板石塔婆（第21図1）
- 図版18 須恵器（第10図2、第18図2～5、第31図
1・2）
平瓦（第17図4、第18図6、第31図3）
- 図版19 中世陶器（第17図2・3、第18図7・8・10、
第22図5）
第5号溝出土磁器（第18図11）
第1号溝出土加工石材（第17図5）
第2号井戸出土加工石材（第22図3）
第3号井戸出土加工石材（第22図6）
溝・グリッド出土遺物（第19図12～16、第31
図6）

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県は、「環境優先・生活重視」、「埼玉の新しいくづくり」を基本理念として、豊かな彩の国づくりを推進するため、種々の施策を講じている。阪神・淡路大震災の教訓を生かすために、まち・安全彩の国構想の一環として、災害時に高齢者や障害者が優先的に避難できるよう、県立高等学校を利用した防災拠点の整備を積極的に進めている。県立行田高等学校（当時）に計画された防災拠点施設整備事業もその一つである。県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成8年10月8日付け教財第573号及び平成9年12月5日付け教財第624号で、財務課長より事業予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて、照会を受けた。文化財保護課では、平成10年1月7日付け教文第1290号で、予定地には馬場裏遺跡（68-

029）が所在し、工事計画上やむを得ず現状変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の3の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨を回答した。

文化財保護課と関係部局との事前協議がなされてきたが、計画変更が不可能であるため、造成地区について記録保存の措置を講ずることとした。

発掘調査については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、県財務課、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等についての協議が行われた。調査は平成9年8月1日から10月31日まで実施された。

なお、発掘調査届に対する指示通知番号は、次のとおりである。

平成9年8月13日付け 教文第2-100号

（文化財保護課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

馬場裏遺跡の発掘調査は、平成9年8月1日から平成9年10月31日までの3か月間にわたって実施した。校地内の南側に位置する調査区は、北側に一部張り出したL字形を呈し、未調査部分を挟んで2地区に分断されていた。そのため便宜的に北側調査区と南側調査区に分けて呼称することとした。なお、調査対象面積は1,900㎡である。

7月下旬、財務課、県立行田高等学校、当事業団の三者によって、現地で発掘調査の工程などについて打ち合わせを行う。

8月、現場事務所の設置を行い、調査補助員募集など本格的な発掘調査に向けて、準備を始める。

発掘調査の工程上、排土置き場の確保が困難なため南側調査区西半部から重機により表土除去作業を開始する。

表土除去後、調査補助員による遺構の精査作業を実施し、竪穴住居跡、溝、土壇、ピット等の遺構が確認された。遺構の調査に着手し、竪穴住居跡、溝等から土師器、須恵器等の遺物が出土し、これらの遺物の取り上げ、遺構の土層断面図作成、写真撮影、平面図作成等を順次進めた。

9月、南側調査区西半分の調査がほぼ完了したため、月上旬に1回目の航空写真撮影を実施した。撮影後、遺構平面図作成と並行して、重機により北側調査区及び南側調査区東半部の表土除去作業を開始する。

南側調査区東半部は全体に攪乱が激しく、遺構の遺存状況は良好でなかったが、縄文時代後期の深鉢形土器など注目すべき遺物の発見もあった。また、北側調査区は狭小な面積にもかかわらず、中世の火葬跡、溝、井戸等の遺構が密に分布していた。引き続き、これら

の遺構の調査に着手し、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、板石塔婆等の遺物が検出され、遺物の取り上げ、遺構の土層断面図作成、写真撮影、平面図作成等を行った。また、並行して格技場に伴うトイレ・シャワー棟建設部分の試掘調査も併せて実施したが、攪乱が激しく遺構・遺物等はまったく検出されなかった。

10月、北側調査区及び南側調査区東半部の遺構の調査・実測作業は順調に進み、中旬には2回目の航空写真撮影を実施した。また、調査期間中社会科授業の一環として遺跡説明会等を開催した。

下旬までには平面図作成等の作業をすべて終了し、最後に重機を用いて北側調査区の井戸の半截作業を実施した。その後、重機により調査区を埋め戻し、現場事務所等の設備の撤去を行い、発掘調査事業の全工程を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理事業は、平成10年9月1日から平成10年12月31日までの4か月間実施した。

9月、出土遺物の水洗い・注記・接合作業を行い、同時に図面、写真類の整理を行った。

10月、遺構の第2原図の作成を行い、トレースに着手した。遺物は接合・復元後、時期ごとに分類して拓本、実測作業を行った。

11月、遺構図の版組作業、遺物のトレース作業、遺物の写真撮影を行った。また原稿の執筆に着手した。

12月、遺物の版組、写真図版作成に並行して、原稿執筆・割付の作成を行った。入稿後校正作業を行い、平成11年2月末に本書の印刷を終了した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成9年度）

理事長 荒井 桂
 副理事長 富田 真也
 専務理事 塩野 博
 常務理事兼管理部長 稲葉 文夫
 理事兼調査部長 梅沢 太久夫

管理部

庶務課長 依田 透
 主査 西沢 信行
 主任 長滝 美智子
 主任 腰塚 雄二
 専門調査員兼経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 菊池 久

調査部

調査部副部長 今泉 泰之
 調査第三課長 浅野 晴樹
 主査 小野 美代子
 主任調査員 伴瀬 宗一
 主任調査員 末木 啓介

(2) 整理事業（平成10年度）

理事長 荒井 桂
 副理事長 飯塚 誠一郎
 常務理事兼管理部長 鈴木 進

管理部

庶務課長 金子 隆
 主査 田中 裕二
 主任 長滝 美智子
 主任 腰塚 雄二
 専門調査員兼経理課長 関野 栄一
 主任 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 菊池 久

資料部

資料部長 増田 逸朗
 主幹兼資料部副部長 小久保 徹
 資料整理第二課長 市川 修
 主任調査員 大谷 徹

II 遺跡の立地と環境

馬場裏遺跡は埼玉県行田市長野に所在し、秩父鉄道東行田駅の北西約500mに位置している。行田市は埼玉県の北東部にあたり、地形的には西部は荒川扇状地の扇端に続き、北・中部から東部にかけては関東造盆運動によって形成された妻沼低地と加須低地が接する沖積平野が広がっている。標高17~20mの平坦な水田地帯であるが、南部は大宮台地の北端に一部かかる。

馬場裏遺跡の所在する長野地区は、標高約16~20mの低ローム台地上に立地し、酒巻導水路(玉野用水)、忍川、元荒川の東側に、行田市長野地区から鴻巣市安養寺地区にかけて約10kmにわたって、南北方向に弧状を呈しながら延びている。この低台地上には埼玉古墳群をはじめとする各時代の遺跡が数多く分布し、当遺跡の北側には柳坪遺跡、南側には林遺跡、中斉遺跡、長野神明遺跡等が連続している。また、当遺跡の東側を日光脇往還が南北に走り、それに沿うように久伊豆神社と長久寺が所在している。文明年間(1469~1487年)に成田下総守顕泰が忍城を築城した際、城の鬼門の守護として久伊豆神社を祀り、隣接する長久寺を創建したと伝えられている。

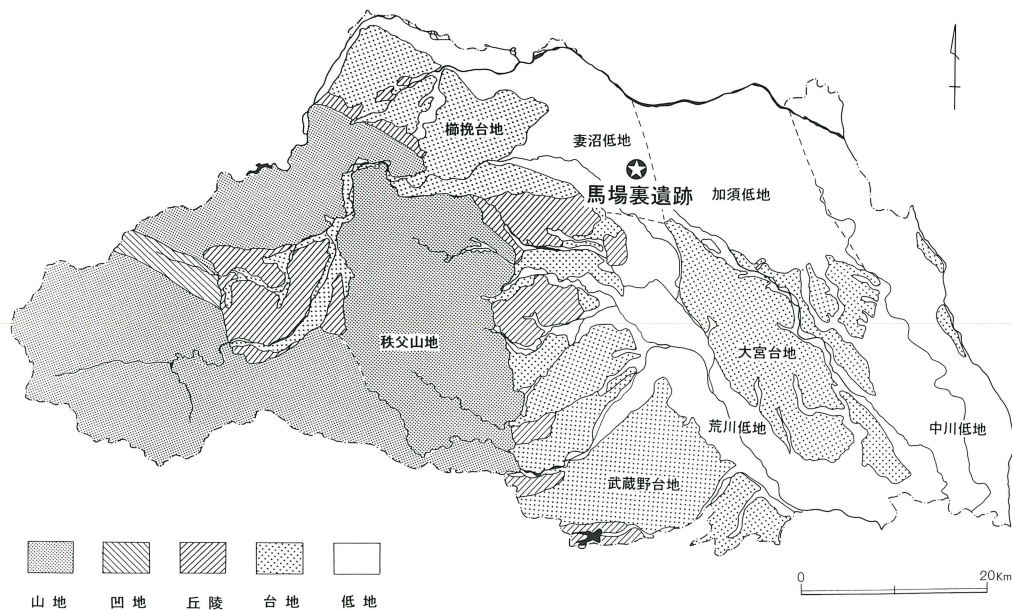
次に、当遺跡周辺の歴史的環境を周辺の遺跡分布図でみることにする(第2図)。

まず、周辺における先土器時代の遺跡は、大宮台地北端の新屋敷遺跡や中三谷遺跡等でナイフ形石器を主体とする石器群が発見されているが、行田市域では調査例が少なく、馬場裏遺跡に包括される長野中学校校内遺跡から削器・細石核等が採集されているだけで、現状では当該期の様相については不明である。

同様に、縄文時代の遺跡の調査例もさほど多くはなく、本遺跡で前期~後期の遺構・遺物が発見されているのをはじめとして、埼玉古墳群周辺の瓦塚古墳西側隣接地、原遺跡、船原・内郷遺跡、稻荷通遺跡、築道下遺跡等で中期から後期の遺跡が調査されている。このうち船原・内郷遺跡2次調査では、後期の称名寺・堀之内式期の竪穴状遺構が検出されており、埋没台地上や自然堤防上に集落跡が形成された様相を窺うことができる。

弥生時代の遺跡は、荒川扇状地の扇端部に位置する池上・小敷田遺跡が著名である。中期前半の須和田期の環濠集落と方形周溝墓が調査され、水稻農耕文化波

第1図 埼玉県の地形図



第2図 周辺の遺跡分布図



第2 図掲載遺跡一覧

1馬場裏遺跡 2林遺跡 3中斉遺跡 4長野神明遺跡 5柳坪遺跡 6白鳥田遺跡 7池守遺跡 8皿尾遺跡 9池上遺跡
10小敷田遺跡 11東沢遺跡 12持田藤の宮遺跡 13野合遺跡 14高畑遺跡 15武良内遺跡 16鴻池遺跡 17西谷遺跡 18渡柳陣場
遺跡 19原遺跡 20原東遺跡 21内郷遺跡 22船原・内郷遺跡 23百塚通遺跡 24旧盛徳寺跡 25小針北遺跡 26小針遺跡 27稲
荷通遺跡 28築道下遺跡 29八ツ島遺跡 30袋・台遺跡 31袋遺跡 32吹上町No.5遺跡 33忍城跡 34忍三郎館跡
a 埼玉古墳群 b 白山古墳群 c 若王子古墳群 d 佐間古墳群 e 若小玉古墳群 f 小見古墳群 g 新郷古墳群 h 大稲荷古墳群
i 斎条古墳群 j 犬塚古墳群 k 酒巻古墳群 l 中条古墳群 m 下忍愛宕神社古墳 n 下忍宝養寺古墳 o 三島神社古墳

及期の具体相を示している。しかし、中期後半から後期にかけて遺跡数は激減し、わずかに袋・台遺跡や船原・内郷遺跡などで住居跡が検出されているにすぎない。

古墳時代に入ると遺跡数が増加し、高畑遺跡、武良内遺跡、鴻池遺跡、渡柳陣場遺跡、長野神明遺跡、柳坪遺跡、白鳥田遺跡、北大竹遺跡、小敷田遺跡などで前期から中期にかけて営まれた集落跡や方形周溝墓などが調査され、東海系のS字状口縁台付甕などの外来系土器が数多く出土し、東海西部地域からの強い影響が指摘されている。こうした遺跡数の急激な増加は、新しい灌漑技術の導入や木製農具、鉄製農工具の普及により、広大な低地部の水田開発が飛躍的に進行したことを物語っており、埼玉古墳群成立の経済的基盤が確立されつつあったことを窺わせる。

古墳時代後期になると大規模集落の成立とともに遺跡数の飛躍的な増大が認められる。代表的な遺跡として小針遺跡、渡柳陣場遺跡、高畑遺跡、築道下遺跡、袋・台遺跡、馬場裏遺跡、長野神明遺跡、小敷田遺跡、池守遺跡等が知られる。中でも、築道下遺跡は稲荷山古墳の築造に併行する5世紀後半から集落の形成が開始され、継続的に大規模集落が営まれており、埼玉古墳群を支えた有力な地域集団と目される。

次に、古墳の様相については、現状では前期・中期古墳の存在は確認されていないが、5世紀後半に金錯銘鉄剣を出土した稲荷山古墳が埼玉古墳群内に築造され、その後、二子山古墳、鉄砲山古墳、將軍山古墳等の全長100mを越す大型前方後円墳や大型円墳の丸墓山古墳等が継起的に築造されている。一方、埼玉古墳群周辺にも白山、若王子、佐間、若小玉、小見、新郷、大稲荷、斎条、酒巻、中条等の各古墳群が、6世紀前

半から7世紀前半を中心に形成されている。

奈良・平安時代の遺跡は、池上遺跡、小敷田遺跡、小針遺跡、原遺跡、愛宕通遺跡、下埼玉通遺跡、馬場裏遺跡、白鳥田遺跡、野合遺跡、内郷遺跡、八ツ島遺跡などが調査されている。このうち小敷田遺跡からは藤原宮期の出挙を記した木簡が出土しており、郡衙またはそれに付属する施設との関連性が指摘されている。また、築道下遺跡では7世紀後半以降、継続的に大規模な掘立柱建物群が営まれており、水上交通の要衝に位置する埼玉郡内の中核的な集落の一つと考えられている。

この他に寺院跡として旧盛徳寺跡がある。寺伝では大同年間(806~809年)の創建とされるが、8世紀末の重廓文軒平瓦や、9世紀後半の単弁4葉軒丸瓦などが出土し、境内には円形の柱座造り出しを有する礎石が現存している。また、旧盛徳寺跡の北方の水田中から「矢作私印」と記された大和古印が出土している。

平安時代末から中世になると、武蔵七党やその他の在地武士団の館跡が多数知られているが、実態の判明するものはほとんどない。行田市付近には久下、忍、河原、長野、行田、麻績、渡柳、広田、野、津之戸、笠原、真名板、多賀谷などの数多くの氏が蟠踞していたことが知られ、現在もその本拠地と考えられる地名や館跡の伝承などが残されている。

中世の遺跡としては、築道下遺跡から13・14世紀代の区画溝を有する墓跡が検出され、板石塔婆22基、蔵骨器6個、埋納焼骨23基等が出土している。また、長野神明遺跡では二重に構堀を巡らした館跡が検出され、この館跡の外堀からは500枚を越す多量の柿経が出土し、当地域の中世の様相を解明する上で極めて重要な情報を提供している。

III 遺跡の概要

馬場裏遺跡は、昭和54年の長野中学校校内遺跡の発掘調査を端緒として、これまでに行田市教育委員会を中心に21次にわたる発掘調査が実施され、先土器時代から中・近世に至る数多くの遺構・遺物が発見され、大きな調査成果が挙げられている（第3図）。

今回の調査は22次調査にあたり、県立行田進修館高等学校の体育館改築工事に伴って発掘調査が実施され、奈良・平安時代の住居跡や中・近世の火葬跡、溝、井戸、土壇等が検出された。なお、平成10年度には当事業団により今次調査区の南側隣接地が調査され（23次調査）、縄文時代中期の竪穴住居跡6軒、奈良・平安時代の住居跡2軒等が検出されている。

既往調査の概要

馬場裏遺跡は、第二次世界大戦中に行われた長野中学校の建設工事の際に発見され、それ以後、校庭から縄文土器や石器が採集されるようになり、昭和38年に栗原文蔵氏により黒耀石製細石核、珪岩製削器等の先土器時代の石器や縄文土器、石器等が紹介されている（註1）。

昭和54年には長野中学校の校舎増築に伴って行田市教育委員会により最初の発掘調査が行われ、加曾利EⅡ式期の住居跡1軒、古墳時代～平安時代の住居跡9軒等が検出された（註2）。また、昭和59年には中島宏氏により長野中学校校庭で採集された縄文土器の報告が行われ、県北部における縄文時代の代表的な遺跡として注目されるようになった（註3）。

昭和60年には長野中学校の貯水槽設置に伴って長野中学校校内遺跡2次調査が実施され、土壇2基と須恵器が検出されている（註4）。この時点までは、長野中学校校内遺跡は長野中学校周辺の比較的狭い範囲と考えられていたが、昭和63年以降に行田市教育委員会が継続的に実施した下水道工事や個人住宅建設に伴う発掘調査の結果、当初予想していた遺跡の範囲よりも拡大することが判明した。そのため当初は別遺跡と

考えられていた馬場裏遺跡と長野中学校校内遺跡が同一の遺跡であることが明らかとなり、以後、馬場裏遺跡に遺跡名が統一され、調査が継続されている。

調査が本格化した昭和63年度には、下水道敷設工事に伴う3・5～7次調査、個人住宅建設に伴う4次調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡（3～5・7次調査区）、大溝（5次調査区）、近世の溝（6次調査区）等が検出された（註5）。このうちの4次調査では奈良・平安時代の住居跡2軒、土壇1基、溝2条が検出され、住居跡から9世紀後半の良好な一括資料が出土している（註6）。

平成元年度には下水道敷設工事に伴う8～13次調査が行われ、奈良・平安時代の住居跡（10～13次調査区）、近世の溝（9次調査区）等が検出された（註7）。平成2年度には下水道敷設工事に伴う14・15次調査と長野中学校の体育館建設に伴う16次調査が行われ、平安時代～中世の溝・土壇（14～16次調査区）、先土器時代の剥片、縄文土器（16次調査区）等が検出された（註8）。平成3年度には長久寺の南側に隣接する17次調査で長久寺に関連する土壇群が検出され、中・近世の様相の一端が明らかにされた（註9）。

平成4年度には個人住宅の建設に伴う18次調査と長野中学校のプール建設に伴う19次調査が実施された。18次調査では古墳時代末～奈良時代の住居跡4軒、溝3条、土壇13基、ピット49基が検出され、大溝から6世紀末～7世紀前半を中心とする黒色処理された土師器がまとまって出土し、注目された（註10）。19次調査では古墳時代後半～平安時代の住居跡16軒・土壇3基、時期不明の溝2条・土壇4基等が検出され、土師器、須恵器、耳環、埴輪、土錘、編物石等の遺物が出土している（註11）。

平成5年度には長野中学校の校庭整備に伴い20次調査が実施され、市内では稀少な縄文時代前期の住居跡3軒・土壇1基、縄文時代後期の住居跡1軒、古墳時代後期の住居跡4軒・土壇1基、平安時代の住居跡

第3図 馬場裏遺跡調査区位置図



発掘主体者 行田市教育委員会



埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1軒、時期不明の溝2条・土壙7基・ピット多数が検出されている(註12)。平成6年度には下水道敷設工事に伴う21次調査が実施され、平安時代の住居跡3軒、溝30条、土壙46基、ピット多数が検出された(註13)。この調査地点は東行田駅の南側にあたり、遺跡の南側への広がり確認され、隣接する林遺跡と本来は一連の遺跡である可能性が指摘されている。

これまでの調査成果から、本遺跡は縄文時代前期から後期の長期間にわたって集落が営まれ、さらに古墳時代後期から奈良・平安時代にかけても大規模な集落が継続的に営まれていたことが明らかにされた。また、中世以降の様相は不明な点が多いが、遺跡の南側に近接する長久寺や久伊豆神社と密接な関連をもちながら、人々の生活の舞台として展開していった様相が窺われる。

今次調査の概要

馬場裏遺跡(22次調査)は、埼玉県「防災基地の整備」施策の一環として、県立行田進修館高等学校の体育館改築工事に伴い、平成9年8月1日から平成9年10月31日まで実施された。発掘調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒、中・近世の火葬跡2基、溝14条、井戸6基、土壙12基、ピット249基等が検出さ

れた。

今回の調査では縄文時代の遺構は検出されなかったが、縄文時代後期の波状口縁の深鉢形土器が単独で検出された。ほぼ完形に近いものであることから、本来は土壙などの遺構に伴っていたものと考えられる。

奈良・平安時代の遺構は住居跡5軒が検出されたが、いずれも攪乱によって大きく壊されており、第1号住居跡から8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる土師器環等が出土したにすぎない。特筆される遺物として、土師質に焼成された瓦堂の屋蓋部の破片が溝から出土しており、仏教信仰の浸透のあり方を検討する上で重要である。

中世以降に位置づけられる遺構は、火葬跡2基、溝14条、井戸6基、土壙12基、ピット多数が検出された。火葬跡は煙道状の突出部を付設したT字形の土壙で、「火葬墓」や「茶毘跡」などと呼ばれている遺構である。小片化した焼骨以外に遺物の出土がなく、時期不詳である。

井戸は計6基が検出され、いずれも素掘りのものであった。このうちの第2号井戸からは阿弥陀如来を主尊とした高さ1mを越す大型の板石塔婆や巴文軒丸瓦などの中世遺物が出土しており、本遺跡の中世の様相を解明する上で貴重な資料を得ることができた。

註

- (1) 栗原文蔵 1963 『古代の行田』 行田市郷土文化会
- (2) 齊藤国夫 1980 『長野中学校校内遺跡発掘調査報告書』 行田市文化財調査報告書第9集 行田市教育委員会
- (3) 中島 宏 1984 「行田市長野中学校校内遺跡採集の縄文土器」『資料館報』No.15 埼玉県立さきたま資料館
- (4) 埼玉県教育委員会 1987 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(昭和60年度)』
- (5) 埼玉県教育委員会 1990 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(昭和63年度)』
- (6) 中島洋一 1990 『さきたま古墳群周辺遺跡発掘調査報告書』 行田市文化財調査報告書第23集 行田市教育委員会
- (7) 埼玉県教育委員会 1991 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(平成元年度)』
- (8) 埼玉県教育委員会 1992 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(平成2年度)』
埼玉県教育委員会 1993 『埼玉県埋蔵文化財調査年報(平成3年度)』
- (9) 中島洋一 1993 『行田市市内遺跡発掘調査報告書II』 行田市文化財調査報告書第28集 行田市教育委員会
- (10) 中島洋一 1994 『馬場裏遺跡(18次)発掘調査報告書』 行田市文化財調査報告書第29集 行田市教育委員会
- (11) 行田市教育委員会 1994 『行田市文化財年報 平成4年度』
- (12) 行田市教育委員会 1995 『行田市文化財年報 平成5年度』
- (13) 行田市教育委員会 1996 『行田市文化財年報 平成6年度』

第4図 全体図 (22次調査)



N 遺構と遺物

1. 縄文時代

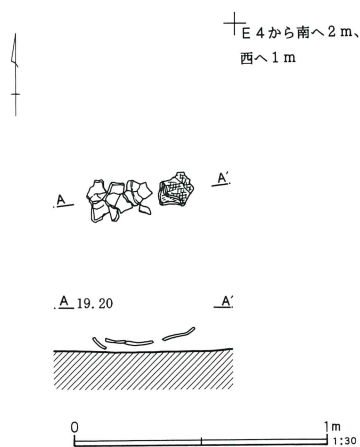
(1) 単独出土土器

縄文時代の遺構は、今回の調査では検出することができなかったが、唯一南側調査区東側のD-4グリッドの北東端から後期の深鉢形土器が、明確な遺構に伴わない状態で単独で出土した。

第13号溝の西側に位置し、遺構確認面では明確な掘り込みが認められず、遺構プランを確認することはできなかったが、土圧によって潰れたような状態で検出された(第5図)。

底部を欠損しているほかは比較的遺存状態が良好であることから、本来は土壇等の遺構に伴っていたものと考えられる。なお、周辺からは同時期の土器片が少量出土している。

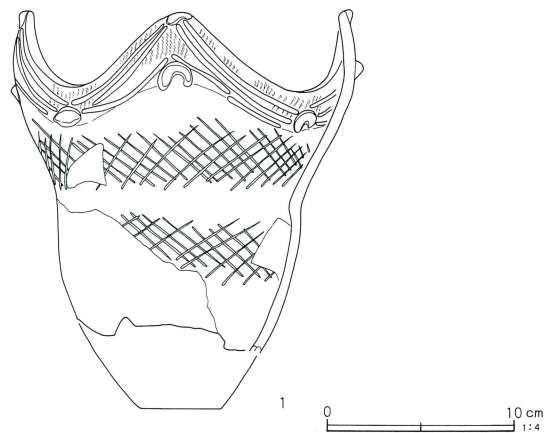
第5図 D-4グリッド出土縄文土器



深鉢形土器 (第5図1)

4単位の波状口縁の深鉢形土器である。胴部中位で括れ、すぼまりながら底部へ移行している。口縁部外面は無節Lの縄文を地文とし、口縁に沿って3条の沈線を施文する。波状口縁の波頂部と、口縁部下沈線の波頂部及び谷部に瘤状の貼付文をそれぞれ施している。また、口縁部下沈線と括れ間及び、括れ下胴部に格子目状文をやや粗く施文する。胴上半部は内外面とも黒色化し、若干脆くなっている。胴下半部外面は二次焼成により赤色化し、器面が荒れ、文様が一部不鮮明となる。胎土は砂粒を多く含んでいる。口径17.0cm、遺存高18.1cmを測り、波状口縁の一部と底部を欠損する。

後期後半の曾谷式高井東系列に位置づけられる。



(2) 遺構外出土遺物

今回の調査では、南側調査区を中心に遺構外から縄文土器63点、石器3点の縄文時代遺物が検出された。

土器は縄文時代早期後葉から後期にわたるものが出土しているが、主体となるのは前期前半の関山II式後半のものである。他には後期前半の称名寺式、後半の曾谷式、安行I式等の土器片が少量出土している。

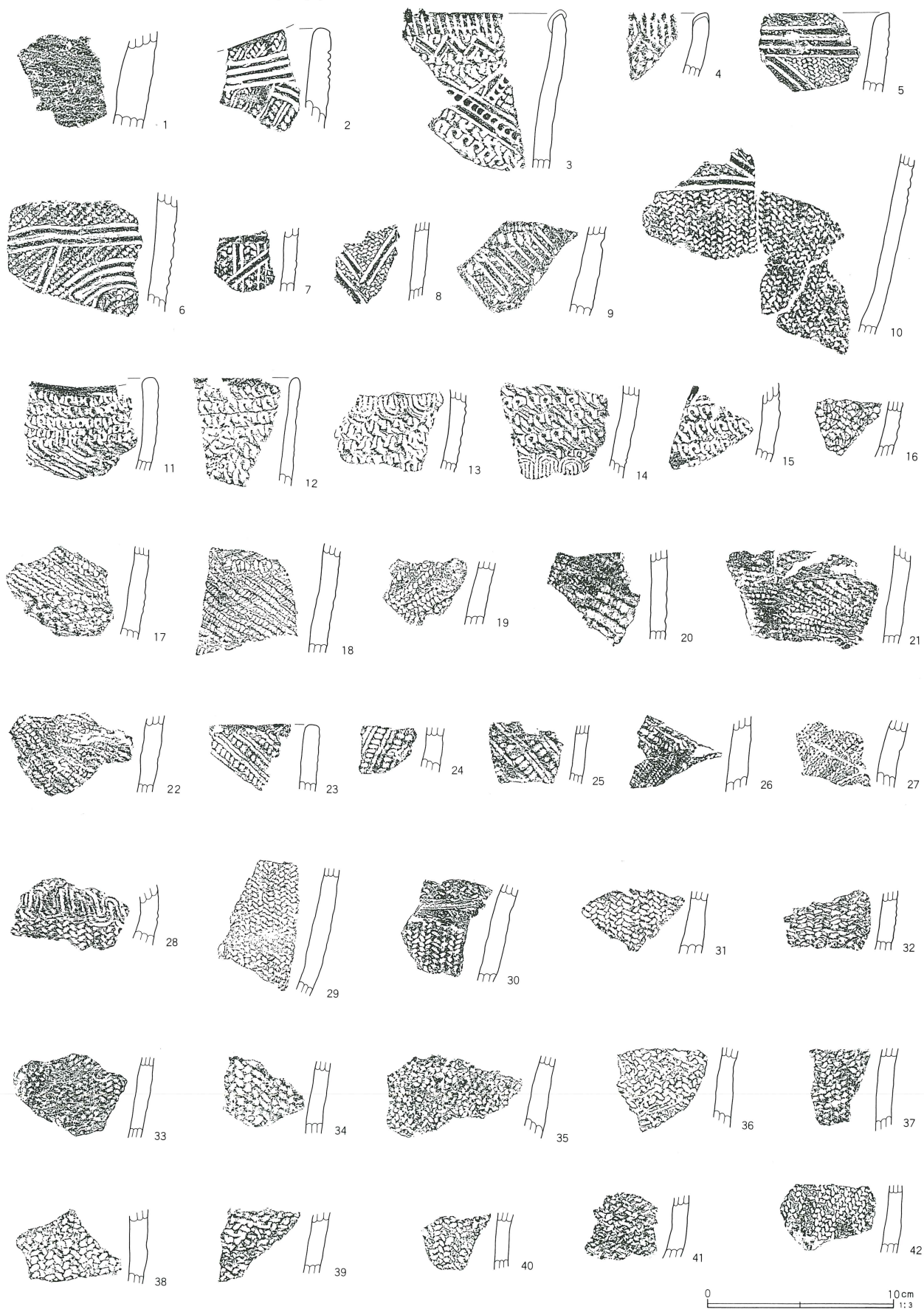
出土した石器はいずれも打製石斧で、分銅形と撥形がある。

土器 (第6・7図1~63)

1は今回唯一出土した条痕文系土器の破片である。表面には擦痕様の条痕が残されているが、裏面は風化のため条痕等を観察することはできない。胎土、器壁の厚さなどの特徴から条痕文系でも後半に位置づけられるものと思われる。南側調査区F-4グリッド出土。

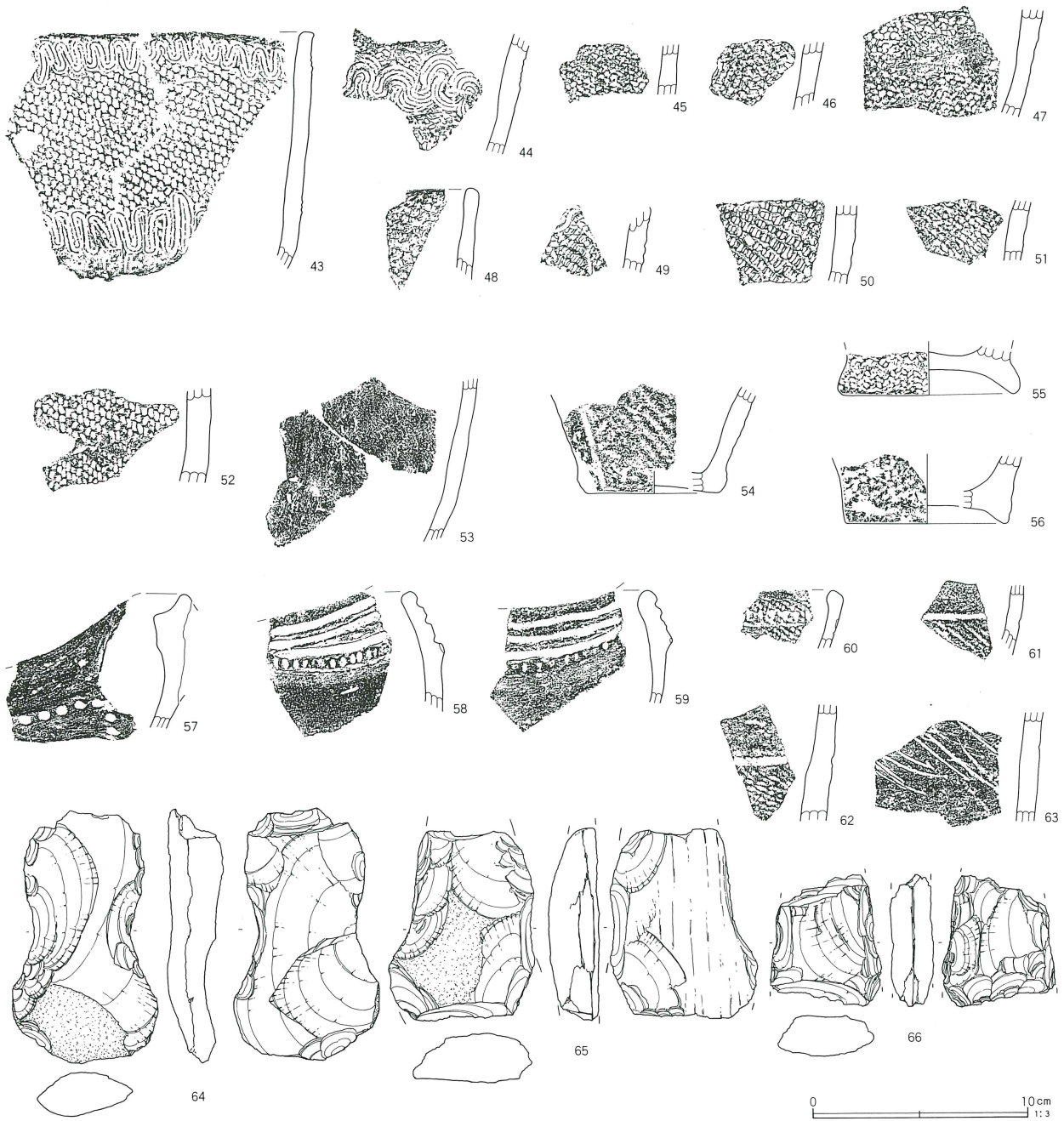
2~56は主体となる関山式土器である。このうち2~10は口縁部及び胴部に文様帯を設けた破片である。いずれも縄文を地文とするもので、多截竹管の内側を

第6図 遺構外出土の縄文時代遺物 (I)



0 10cm
1:3

第7図 遺構外出土の縄文時代遺物(2)



引きずって地文を磨り消している。3はこれに加えて沈線内に爪形文を充填し、合わせてループ文も鋸歯状に施文している。

11~22は単節斜縄文を地文とするものである。このうち11~18は原体の末端をループ処理している。縄文の原体はRLが多く、19のみがLRである。

23~27は異条斜縄文を地文とするもので、このうち23~25は撚り合わせによる、いわゆる正反の合である。

また、26・27は2本の縄を軸縄の撚りと逆方向に絡げた附加条縄文が施文されている。

28~42は4本組紐の回転痕が施文されたものである。29・32はRRLL、40・42はLLRRの原体を使用していることが識別できるが、他の破片の詳しい原体については明確ではなく、39・41などは後述する組紐の組違いを施文したものかもしれない。

43~52は組紐の組違い原体を押捺したと考えられ

る破片である。43は1段のLとRをもち寄り、結果的にR方向に絡げてしまった原体を転がす組違いの典型例で、異節斜縄文と同一の圧痕が認められる。おそらく、44～47も同一の原体と考えられる。48～50は組違いの際にもち寄った縄が同方向のものであり、いずれもL2本を使って、R方向に絡げている。結果的に3段の擬似単節が現れている。また、51はR2本を使った組違いで、Rに絡げたことにより、結果的に擬似複節の圧痕が表れている。これに対し、52は同じ組違いと考えられるが節の大きさが小さく、細節も観察できないことから0段の縄を使用したものと考えられる。

53～56は無文と底部の破片である。底部の3点はいずれも緩い上底状に成形されている。地文は、54が単節斜縄文、55が組紐縄文を施文しているが、56は風化のため明瞭でない。

これら関山式土器の多くは南側調査区東端のF-4グリッドの攪乱土中から出土していることから、調査区の東半部を中心に当該期の遺構がかつて存在していた可能性が強い。

57～63は後期に属する破片を一括した。57は波状口縁をもつ称名寺式と考えられる深鉢の口縁部破片である。58・59は同一個体の破片で、口縁下に平行沈線を巡らし、隆帯に篋状工具先端による刺突を施した曾谷式高井東系列の深鉢である。60は口縁下に列点を伴う1条の沈線を巡らした口縁部の破片で内側が肥厚す

る。安行I式に比定される。61は横位の沈線区画がみられるもので、安行I式と考えられる。62は沈線を用いて横方向に区画したもので、称名寺式に位置づけられる。63は条線文を施した深鉢の胴部破片である。曾谷式高井東系列と考えられる。

後期に属する土器片は、前述した単独出土の深鉢形土器に近接した第6・13号溝の覆土中より出土しており、前期の土器片とはやや分布域を異にしている可能性が高い。

石器 (第7図64～66)

石器3点は、いずれも打製石斧である。

64は分銅形のもので完存する。全体に風化が進んでおり、剝離面の方向は不明瞭なものが多い。分銅形の形態と抉入部の潰れ具合から後期の所産と考えられる。長さ11.7cm、幅6.8cm、厚さ2.6cm、重さ190.50g、石材はホルンフェルスである。南側調査区西半分の第5号溝の覆土中に混入していた。

65・66の2点は上下端を欠損する。比較的重量のある撥形のものに復元され、前期の所産と考えられる。65は裏面に節理面を残した礫岩製のもので、遺存長8.8cm、幅6.9cm、厚さ2.4cm、重さ192.29g。66は遺存長6.1cm、幅5.2cm、厚さ2.1cm、重さ77.39g、石材はホルンフェルスである。65・66は南側調査区北端の第2号溝の覆土中より出土した。

参考文献

- 庄野靖寿・下村克彦 1978 『貝崎貝塚第3次調査報告』大宮市文化財調査報告第12集 大宮市教育委員会
小倉 均・黒坂禎二 1981 『大古里遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第19集 浦和市遺跡調査会

2. 奈良・平安時代

(1) 概要

今回の調査では奈良・平安時代の竪穴住居跡5軒が検出された。南側調査区の西半分には第1～3号住居跡の3軒と、東半分に第4・5号住居跡の2軒が大きく分かれて分布していた。第1号住居跡以外はすべて後世の攪乱を受けており、壁及び床面の一部を検出しただけで、住居の平面形やカマドの有無等の詳細について明らかにすることはできなかった。

出土遺物は、第1号住居跡で8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる土師器坏が出土したほかは、いずれ

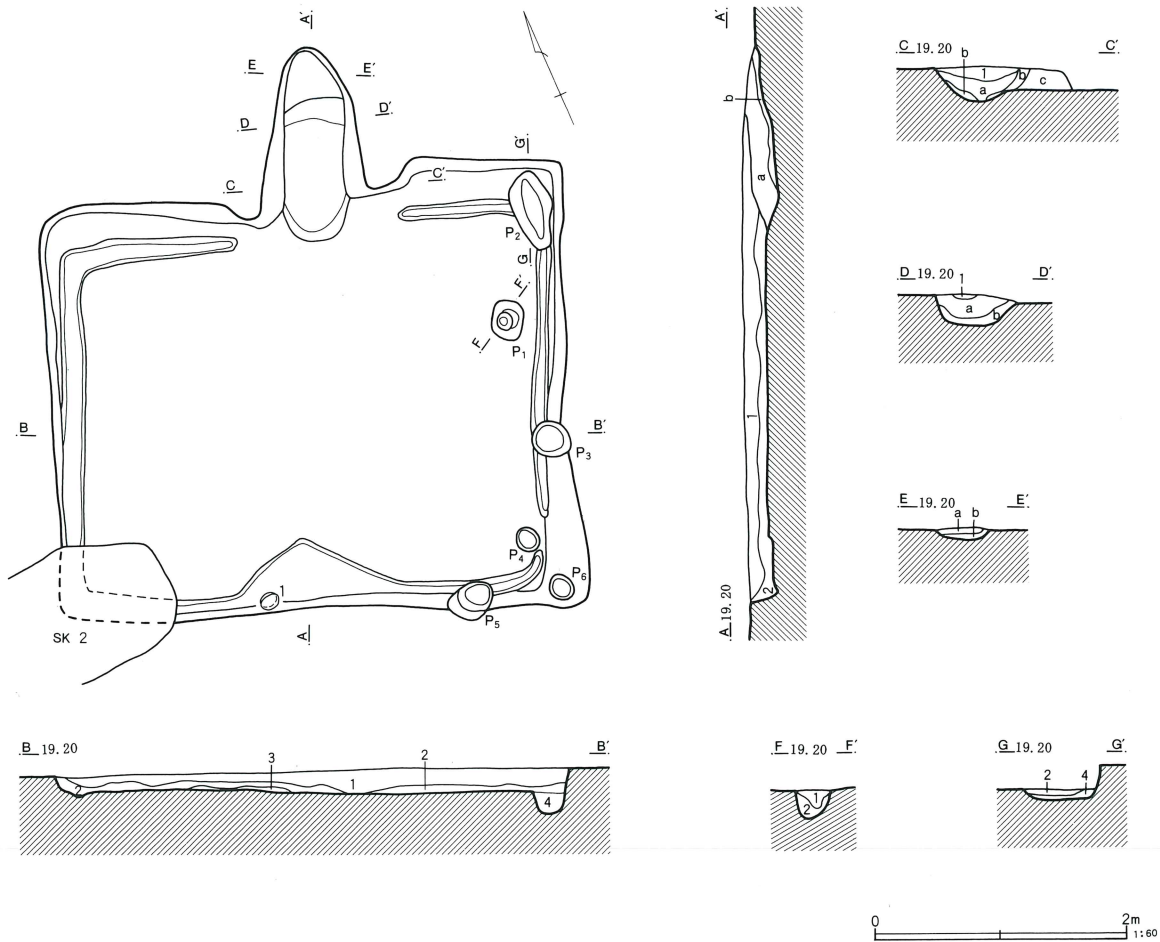
も破片ばかりで所産時期を明示するような遺物の出土はなかった。ただし、後述するように中世の第1号溝の覆土中から土師質に焼成された瓦堂の屋蓋部の破片(第17図1)が出土しており、本遺跡の性格を問題にする上で重要な遺物として注目される。

(2) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第8図)

第1号住居跡は南側調査区北西のB-2・3グリッドに位置し、南東約10mに第2・3号住居跡が所在す

第8図 第1号住居跡



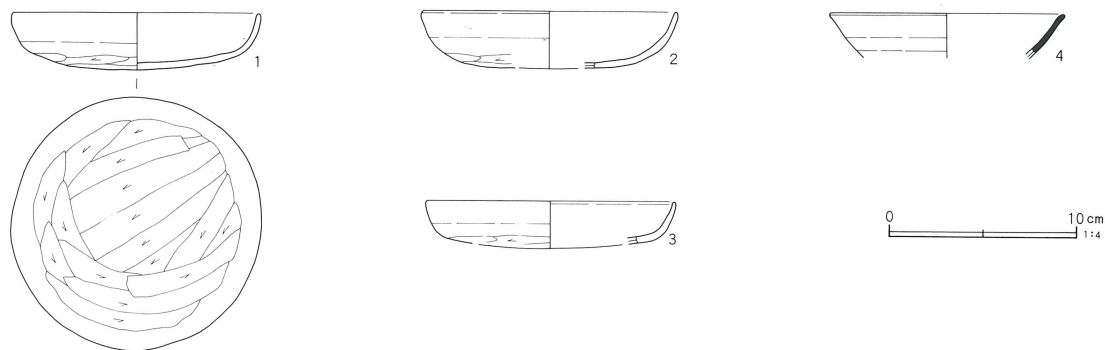
S J 1

- 1 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子・灰色粘土ブロック(少)
- 2 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子(多) ロームブロック(少)
- 3 褐色 10YR4/4 ローム粒子(中) ロームブロック(多)
- 4 褐色 10YR4/4 ローム粒子(中) 焼土ブロック(少)

カマド

- a 黒褐色 10YR3/2 炭化粒子(少) 焼土ブロック(多)
- b 褐色 10YR4/4 ローム粒子(中) 焼土ブロック(少)
- c にぶい黄褐色 10YR4/3 ローム粒子(少)

第9図 第1号住居跡出土遺物



る。北辺の壁面にカマドを構築し、長軸を東西方向に採る長方形平面の竪穴住居跡である。南西コーナーは第2号土壌が重複しているため、壁と床面の一部が壊されていた。規模は東西長4.16m、南北長3.56m、確認面から床面までの深さは0.2mを測る。竪穴部の主軸方位はN-25°-Eを示す。

カマドは北辺のほぼ中央に設置され、長さ1.54m、燃焼部幅0.84mを測る。燃焼部は床面から10cmほど浅く皿状に掘り込み、火床面はほとんど残っていなかった。煙道部は燃焼部と10cmほどの段差を有し、緩やかに傾斜しながら壁外に張り出す。カマドは袖部だけを遺存していたため構築方法については明確でないが、基本的に地山を掘り残して、カマド袖の基部に利用し、灰色粘土等を用いて構築したものと考えられる。カマドの覆土の観察によればa・b層は焼土ブロックを含むことから天井崩落土に相当するものと思われる。カマドの主軸方位はN-20°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、特に硬化面などは確認されなかった。壁溝はカマド部分を除いてほぼ全周し、幅24cm、深さ13cmを測る。南辺の中央で三角形に幅を拡張していることから入口施設との関連が想定されたが、

性格については明確にし得なかった。また、北辺側の壁溝は壁際を巡らず、わずかに内側を巡っていた。

ピットは合計6本が検出された。断面観察により明確に柱穴と断定できるようなものはなく、住居跡に伴うものは少ないと考えられる。

遺物は南辺中央の壁際から土師器坏の完形品が、床面よりわずかに浮いた状態で出土した。この他に覆土中から同形態の土師器坏片2点とカマド覆土中から須恵器坏片1点が出土した。

出土遺物 (第9図)

1～3は体部の扁平な丸平底形態の土師器坏である。口縁部が体部から内湾気味に立ち上がる1と、体部から外傾して口縁部に移行する2・3の二形態に区分できる。両者とも体部の扁平化及び口縁部の直立化傾向が顕著で、体部のヘラケズリも不調整部分を残している。年代的には8世紀末～9世紀初頭に位置づけられる。

4の須恵器坏は小破片からの図上復元で、土師器よりもやや新しい9世紀前半の所産と推定され、混入の可能性も考えられる。

第1表 第1号住居跡遺物観察表 (第9図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	13.2	3.0		ADEFJ	B	橙褐色	100	壁際 完形
2	土師器坏	(13.6)	3.0		ABEFJ	B	橙褐色	20	覆土
3	土師器坏	(13.2)	(2.5)		ABEFJ	B	褐色	30	覆土
4	須恵器坏	(12.4)	2.4		ABGJ	A	灰色	10	カマド 産地不明

第2号住居跡 (第10図)

第2号住居跡は南側調査区の南西、B-4グリッドに位置し、東半部は攪乱によって削平されていた。北東側に第3号住居跡が近接し、位置的には一部重複しているものと想定されるが、攪乱により両者の先後関係については不明である。また、南西コーナーには第10号溝が重複していた。

竪穴部の西辺を中心とした部分のみを遺存しており、住居の平面形態やカマドの有無については明確でない。西辺長3.04m、確認面から床面までの深さ0.14mを測り、竪穴部の主軸方位はN-21°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、特に硬化面などは認められな

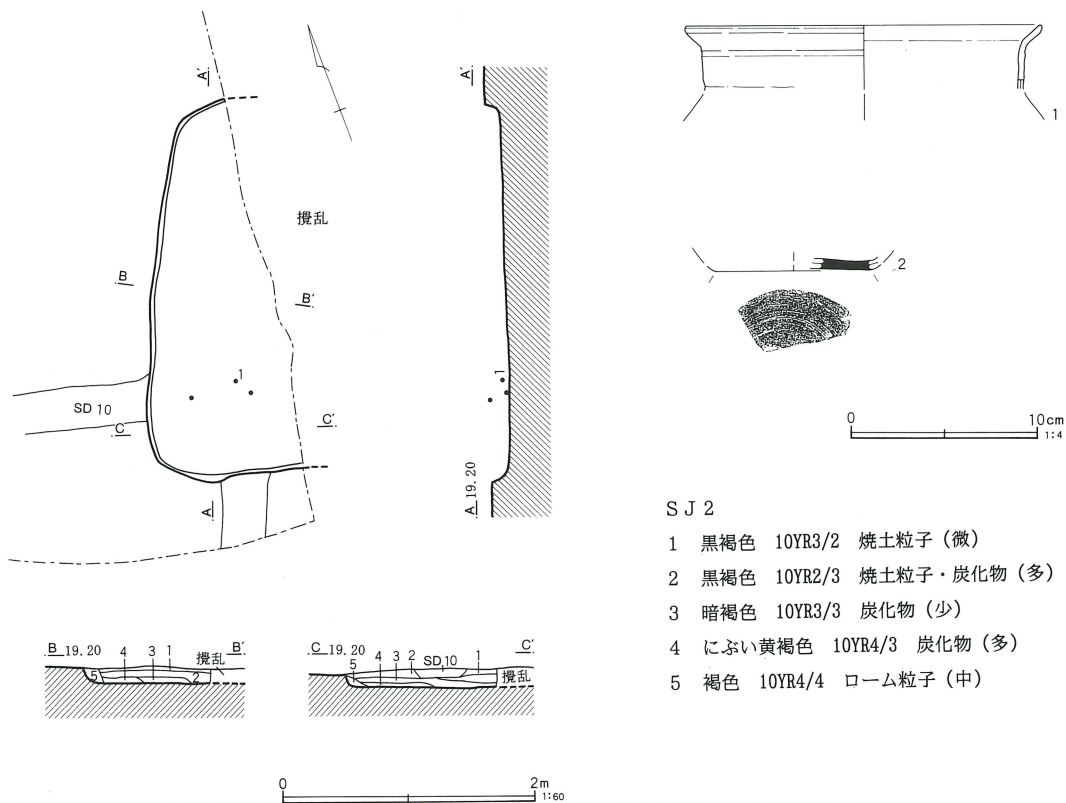
かった。覆土は自然堆積を示し、焼土粒子、炭化物が混入していた。

出土遺物は全体に少なく、土師器甕1点、須恵器環1点の計2点が図示できた。

出土遺物 (第10図)

1は南西コーナー寄りの床面から少し浮いた状態で出土した「コ」の字状口縁の土師器甕で、9世紀前半に位置づけられる。2の須恵器環は胎土に白色針状物質を含む南比企窯跡群産の製品で、底部全面に二次調整の回転ヘラケズリを施す。甕の年代よりもやや古く位置づけられることから、混入の可能性が高い。

第10図 第2号住居跡・出土遺物



S J 2

- 1 黒褐色 10YR3/2 焼土粒子 (微)
- 2 黒褐色 10YR2/3 焼土粒子・炭化物 (多)
- 3 暗褐色 10YR3/3 炭化物 (少)
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 炭化物 (多)
- 5 褐色 10YR4/4 ローム粒子 (中)

第2表 第2号住居跡遺物観察表 (第10図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器甕	(19.0)	3.4		A E F G J	B	褐色	15	覆土 「コ」の字甕
2	須恵器環		0.6	8.2	A C D J	B	灰白色	40	覆土 底部全面ヘラケズリ二次調整 南比企産

第3号住居跡 (第11図)

第3号住居跡は南側調査区の南西、B-3・4グリッドに位置する。西半部は攪乱によって削平され、北東コーナーを中心に検出された。南西側に第2号住居跡が近接し、本来は重複していたものと想定されるが、攪乱のため両者の先後関係については不明である。

竪穴部は北東コーナーを中心とする部分のみを遺存しており、住居の平面形態、規模、カマドの有無等については不明である。確認面から床面までの深さは12cmと掘り込みは浅い。竪穴部の主軸方位は遺存する南北辺を基準とすればN-52°-Eを示し、他の住居跡に比べやや東に振れている。

床面は概ね平坦で、北東コーナー際にピット1が検

出された。ピット1は略円形を呈し、径22×16cm、深さ10cmである。

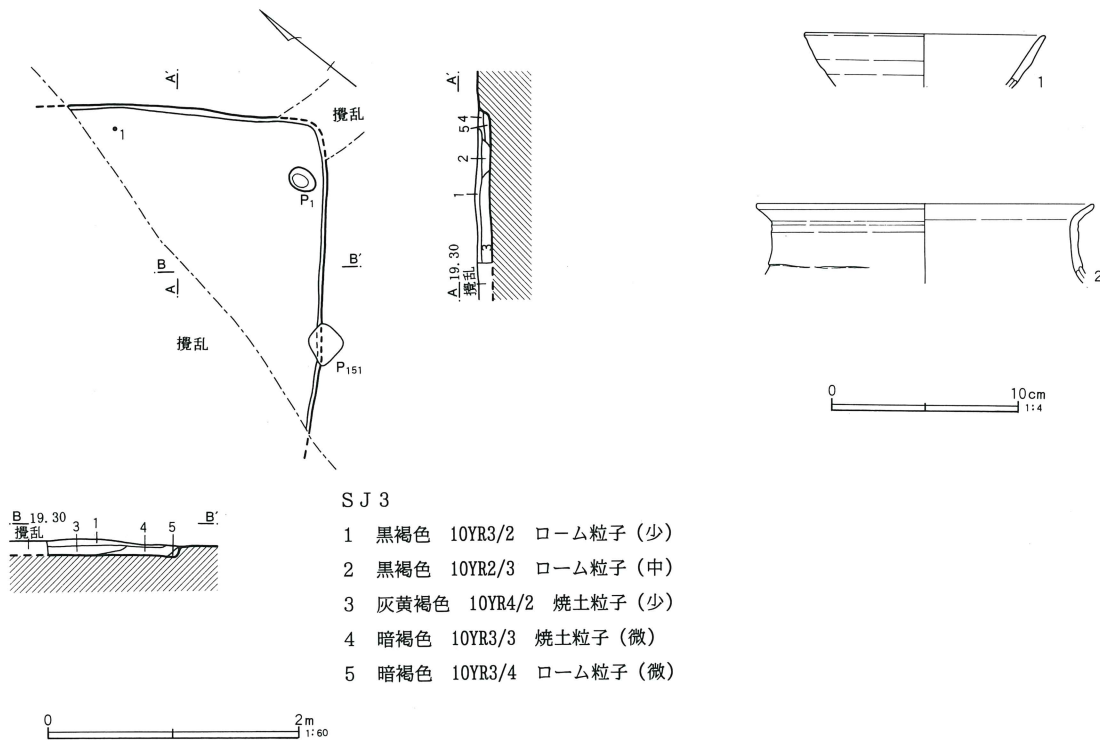
覆土は自然堆積を示し、大きく5層に区分される。床面上に薄く堆積する3・4層には焼土粒子の混入が確認された。

出土遺物は全体に少なく、土師器坏1点、同甕1点の計2点が図示できた。

出土遺物 (第11図)

1は北壁際から出土したロクロ成形の土師器坏で、通有の土師器と同じ砂っぽい胎土である。2は覆土中から出土した「コ」の字状口縁の土師器甕で、第2号住居跡から出土したものとはほぼ同一形態のものである。時期は9世紀前半に比定される。

第11図 第3号住居跡・出土遺物



第3表 第3号住居跡遺物観察表 (第11図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器坏	(12.8)	2.8		A B E F J	B	乳白色	30	覆土 ロクロ整形
2	土師器甕	(18.0)	4.2		A B E F J	B	暗褐色	10	覆土 「コ」の字甕

第4号住居跡 (第12図)

第4号住居跡は南側調査区の北東、F-3グリッドに位置する。大部分が攪乱によって壊され、床面の一部を検出したにすぎない。北辺は第1号溝と重複し、東側に第5号住居跡が近接する。第5号住居跡とは位置関係からすれば本来は重複関係にあったものと想定されるが、攪乱のため先後関係は明確でない。

竪穴部は南辺を中心とする部分のみを検出した。床面は概ね平坦で、南辺に壁溝を巡らしている。また、壁溝に接してピット1が検出された。ピット1は平面楕円形を呈し、径93×72cm、深さ7cmを測る。土層断面の観察では人為的に埋め戻されていることから、床下土壌、あるいは貼床部分と考えられる。

遺物はまったく出土していない。

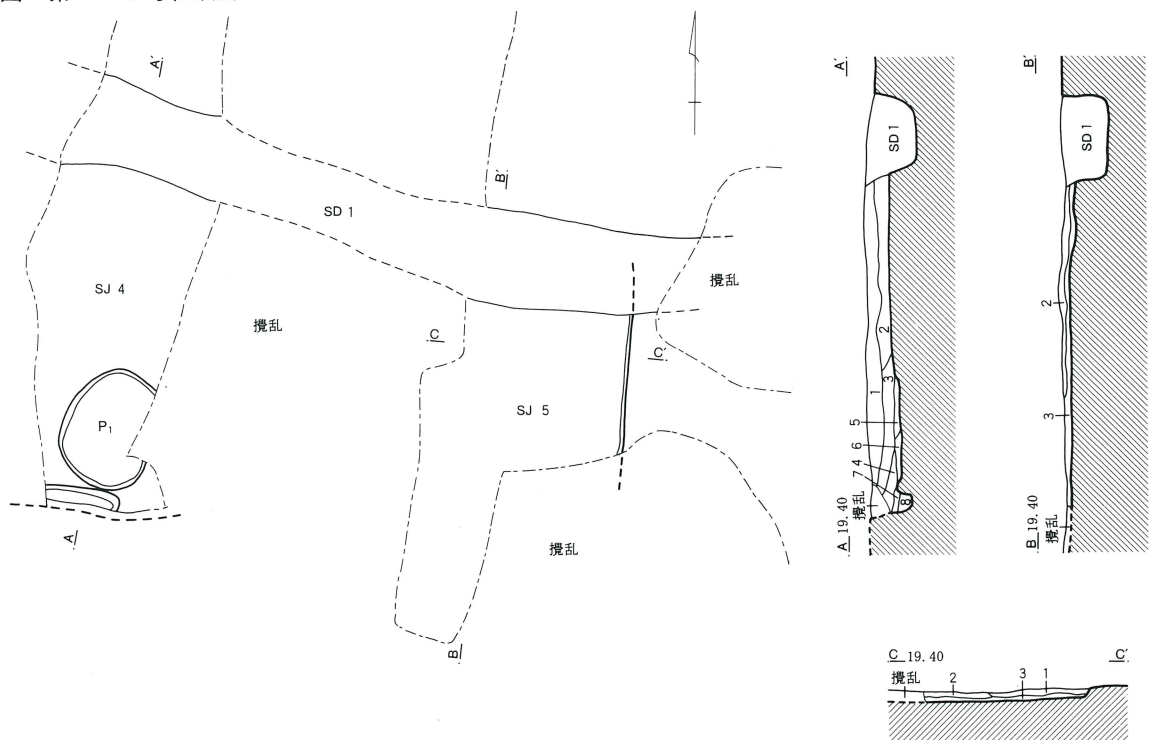
第5号住居跡 (第12図)

第5号住居跡は南側調査区の北東、F-3グリッドに位置する。大部分が攪乱によって壊され、床面の一部を検出したにすぎない。北辺は第1号溝と重複しており、西側に第4号住居跡が近接する。前述したように第4号住居跡とは、本来重複関係にあったものと考えられるが、攪乱のため先後関係は明確でない。

竪穴部は東辺を中心とする部分を遺存しており、竪穴部の主軸方位は東辺を基準とすればN-18°-Eを示す。床面は概ね平坦で、特に硬化面などは認められなかった。覆土は大きく3層に区分され、焼土粒子、白色粒子等が混入していた。

遺物はまったく出土しないため、帰属時期については明確でない。

第12図 第4・5号住居跡



SJ 4 (A-A')

- 1 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子(少) 炭化物(微)
- 2 黒褐色 10YR3/2 炭化物(微)
- 3 黒褐色 10YR2/2 ローム粒子(多)
- 4 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子(微) 炭化物(多)
- 5 黒褐色 10YR2/2 炭化物(多)
- 6 褐灰色 10YR4/1 ローム粒子(微)
- 7 にぶい黄褐色 10YR5/4 ローム粒子(少)
- 8 黒色 10YR2/1 炭化物(多)

SJ 5 (B-B'・C-C')

- 1 暗褐色 10YR3/4 焼土粒子・炭化粒子(微) 白色粒子(多)
- 2 暗褐色 10YR3/4 白色粒子(少)
- 3 褐色 10YR4/4 白色粒子(少)

3. 中世・近世

検出された中世・近世の遺構は、火葬跡2基、溝14条、井戸6基、土壇12基、ピット249基を数える。各遺構とも出土遺物が少なく、所産時期を特定することは困難であるが、覆土等の状況から中世・近世に属するものと判断した。

(1) 火葬跡

北側調査区から2基の火葬跡が近接した状態で検出された。掘り込みの浅いT字形の土壇で、長辺の一方に煙道状の突出部を付設している。最近の調査では「火葬墓」や「茶毘跡」などと呼ばれている遺構で、その性格については必ずしも特定されていない。小片化した焼骨以外、遺物の出土がまったくないことから、遺体を火化し、拾骨した様相が窺われ、ここでは「火葬跡」と称することとする。

第1号火葬跡 (第13図)

北側調査区のB-1グリッドに位置し、南へ1.7m

のところ、第2号火葬跡が所在する。

南東方向に突出部を付設したT字形土壇で長径1.27m、短径0.61m、深さ0.12mを測る。突出部は底面をわずかに掘り込む。主軸方位はN-18°-Eを指す。覆土に焼骨や焼土、炭化物等を多く含んでいたが、壁面に赤変した部分は確認できなかった。

遺物は焼骨以外出土しなかった。

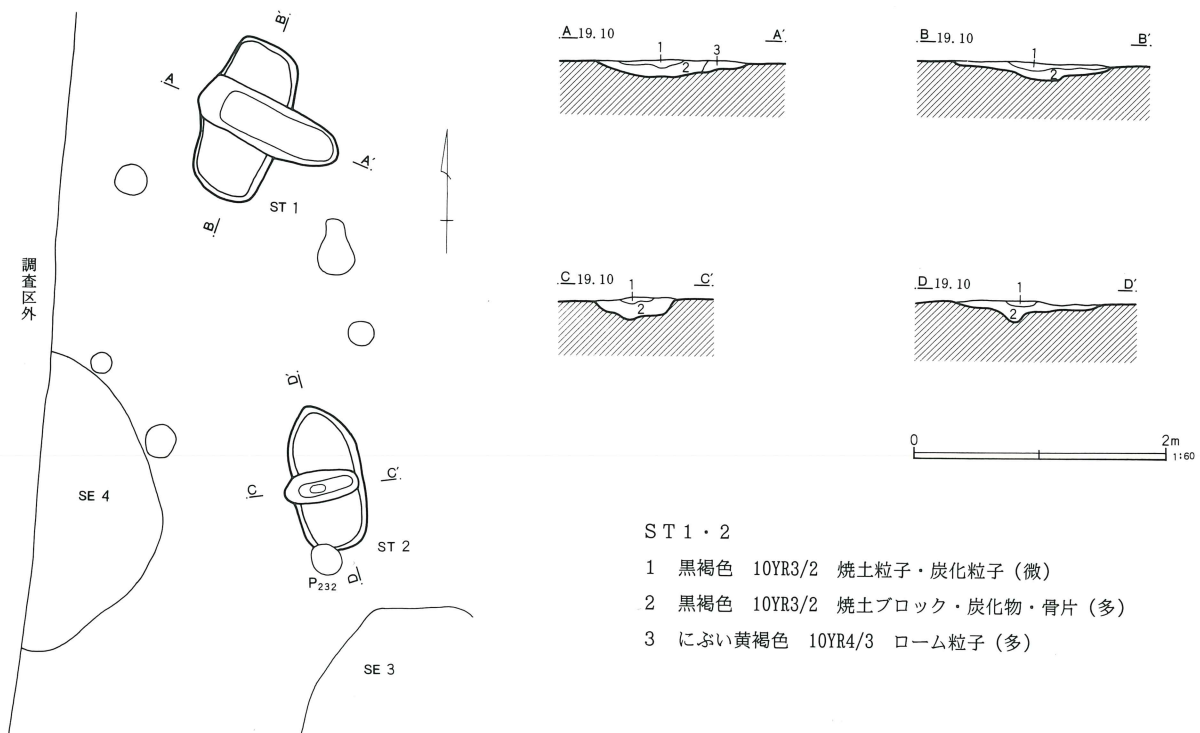
第2号火葬跡 (第13図)

北側調査区のB-1グリッドに位置し、北側に第1号火葬跡が近接する。

第1号火葬跡とは逆方向に突出部を付設したT字形土壇で、長径1.16m、短径0.55m、深さ0.16mを測る。第1号火葬跡と比較すると、突出部の掘り込みは深い。壁外への突出は短い。主軸方位はN-18°-Wを指す。覆土に焼骨や焼土、炭化物等を多く含んでいたが、壁面に赤変した部分は確認できなかった。

遺物は焼骨以外出土しなかった。

第13図 第1・2号火葬跡



(2) 溝

溝は合計14条が検出された。北側調査区内で確認された第14号溝以外は、すべて南側調査区内から検出されている。溝の分布は南側調査区北端を東西方向に走行する一群と、それに対して北東から南西に斜行する一群に大きく区分することができる。

全体に遺物の出土量が少ないうえに複数の時期の遺物が混入しており、溝の性格や時期を限定することのできるものは少ない。

第1号溝 (第14・15図)

南側調査区北辺を第2～4号溝と並行して東西方向に走行する。調査区の中ほどで第8・11号溝と重複しており、土層断面の観察から第11号溝より新しく、第8号溝よりも古いことが確認された。また、調査区北東端で第4・5号住居跡と重複し、それを切っていた。規模は幅0.9～1.3m、深さ0.3mを測り、断面形は二段に掘り込まれた浅い逆台形を呈する。

遺物は瓦堂、陶器鉢、在地産鉢、平瓦、加工石材等(第17図)が出土した。このうち覆土上層から出土した瓦堂の屋蓋部破片だけは平安時代の所産と推定されるが、他はすべて中世の所産である。

第2号溝 (第14・15図)

南側調査区北辺の第1・3号溝の間を並行して東西方向に走行し、調査区の中ほどで第1号溝に合流する。規模は幅1.0m、深さ0.2m、断面形は台形を呈する。

遺物は須恵器甕口縁部破片(第18図4)が出土しているが、溝の開削時期については明確でない。

第3号溝 (第14・15図)

南側調査区北辺の第2・4号溝の間を並行して東西方向に走行する。掘り込みが浅いため、調査区の中ほどで途切れてしまう。規模は幅0.6m、深さ0.1m、断面形はレンズ状である。

遺物は渥美産と推定される陶器甕の胴部破片(第18図10)が出土している。

第4号溝 (第14・15図)

南側調査区北辺を東西方向に走行し、第5・7～9号溝によって切られている。第1・2号溝と並行して直線的に延び、東端は攪乱により削平されている。規模は幅1.2m、深さ0.7m、断面形は逆台形状に二段に掘り込まれる。

遺物は平瓦、陶器播鉢、在地産鉢等(第18図6～8)が出土した。出土遺物には14～15世紀とやや幅があるが、いずれも中世の所産であることから溝の時期もそれに近い時期と想定される。

第5号溝 (第14・15図)

南側調査区西半部に位置し、L字形に屈曲する幅広の溝である。東辺には第6号溝が接するように南北に走行しており、土層断面の観察では第6号溝よりも新しいことが判明した。規模は幅2.7m、深さ0.6mを測り、断面形は底面の幅広い逆台形で、南側は二段に掘り込まれていた。この溝によって区画された内部から多数のピットが検出されており、何らかの区画を意図したものと考えられるが、その性格は明確でない。

出土遺物は須恵器甕口縁部、土師質皿、磁器碗、陶器瓶、鉄製品等(第18図3・9・11、第19図12～14)が出土した。

第6号溝 (第14・15・16図)

第5号溝の東側に接するように南北方向に延び、北端は第4号溝に合流している。規模は幅0.6m、深さ0.3mを測り、断面形は逆台形を呈する。

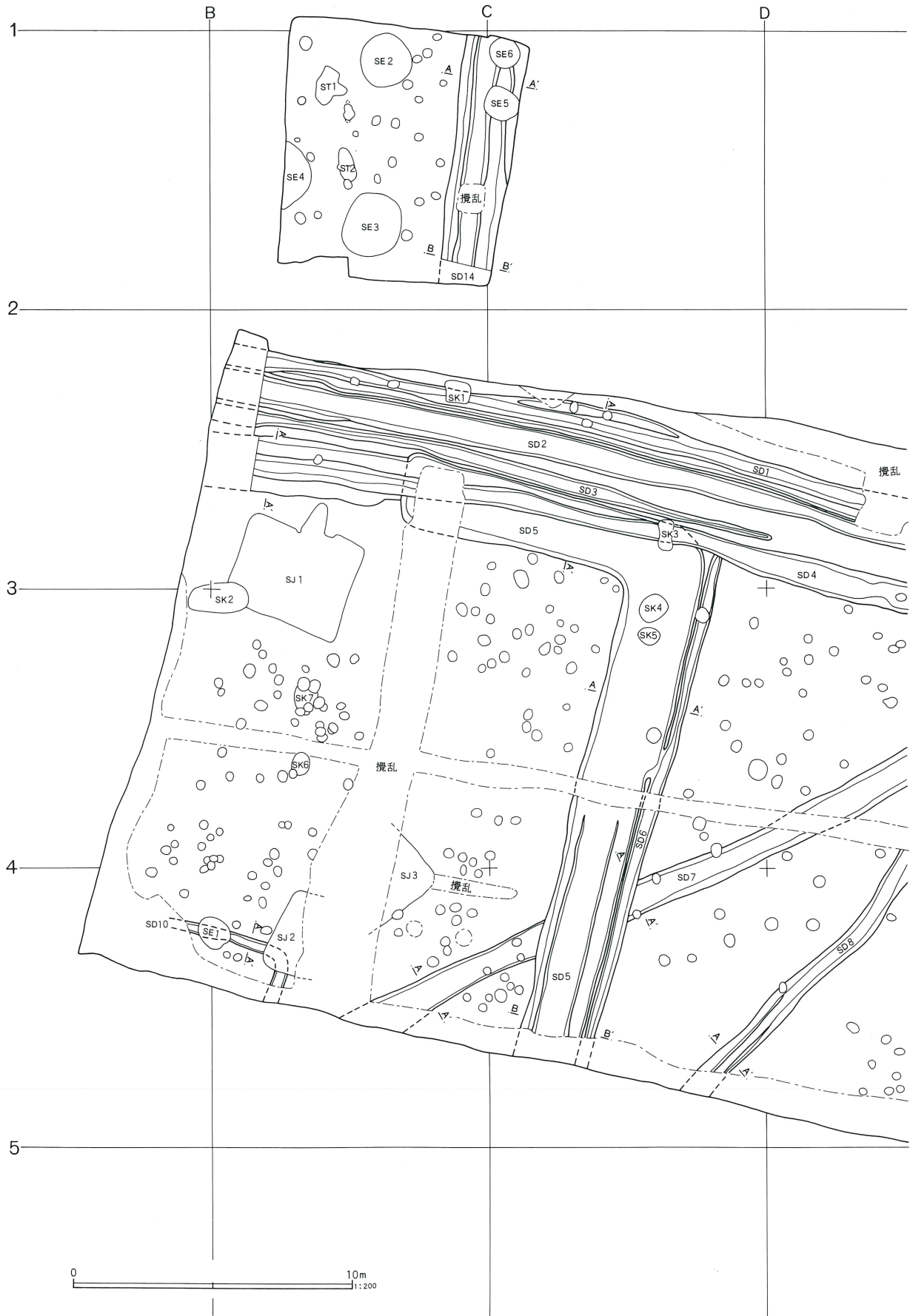
遺物はまったく出土しなかった。

第7号溝 (第14・15・16図)

南側調査区を南西から北東方向に走行する溝で、第4～6・8・9号溝、第9号土塼と重複する。このうち第8・9号溝より新しく、第5・6号溝よりも古いことが土層断面から確認された。規模は幅1.2m、深さ0.5m、断面形は浅いレンズ状を呈する。

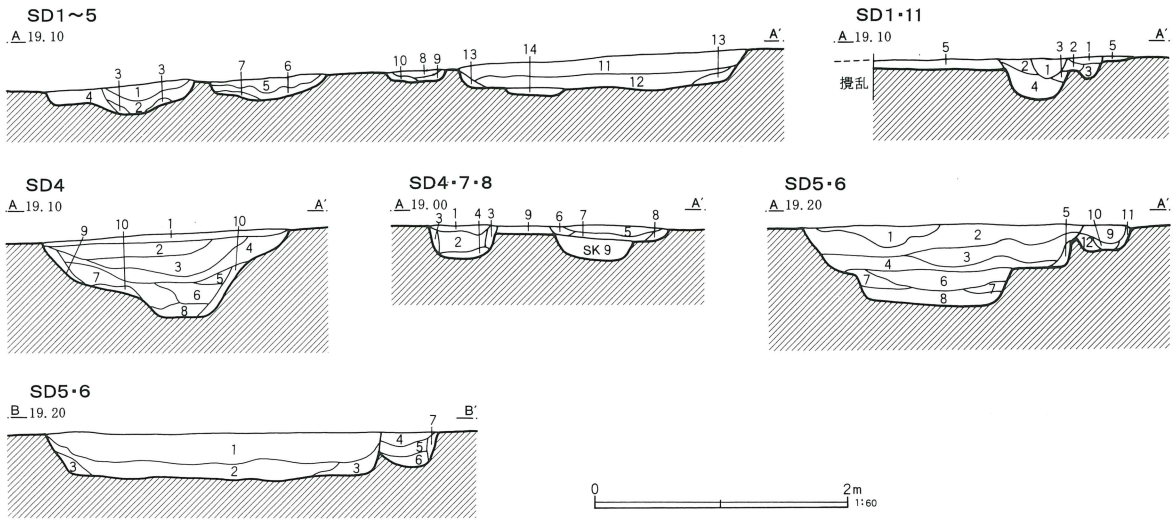
遺物は古墳時代後期に位置づけられる土師器坏、須

第14図 溝 (I)





第15図 溝 (2)



SD 1 ~ 5

- 1 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒子 (少)
- 2 暗褐色 7.5YR3/3 ローム粒子 (微)
- 3 橙色 7.5YR7/6 酸化鉄粒子 (多)
- 4 褐灰色 7.5YR4/1 ローム粒子 (少)
- 5 黒褐色 10YR2/2 ローム粒子 (少)
- 6 褐灰色 10YR4/1 炭化物 (微)
- 7 黄褐色 10YR5/8 酸化鉄粒子 (微)
- 8 褐灰色 10YR4/1 ローム粒子 (少)
- 9 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (多)
- 10 暗褐色 10YR3/4 ロームブロック (少)
- 11 灰黄褐色 10YR5/2 焼土粒子・炭化物 (微)
- 12 褐灰色 10YR5/1 焼土粒子・炭化物 (微)
- 13 暗褐色 10YR3/4 酸化鉄粒子 (微)
- 14 にぶい赤褐色 5YR4/3 酸化鉄粒子 (多)

SD 1 ・ 11

- 1 黒褐色 10YR3/1 焼土粒子・炭化物 (微)
- 2 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (微)
- 3 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子 (少)
- 4 褐灰色 10YR4/1 ローム粒子 (少)
- 5 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子・炭化物 (微)

SD 4

- 1 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (微)
- 2 にぶい黄褐色 10YR5/3 ローム粒子 (微) 炭化物 (多)
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (微)
- 4 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (多) 炭化物 (微)
- 5 暗褐色 10YR3/4 ローム粒子 (少) 炭化物 (多)
- 6 暗褐色 10YR3/3 焼土粒子 (少) 炭化物 (微)
- 7 褐灰色 10YR4/1 ローム粒子 (多)
- 8 褐灰色 10YR5/1 酸化鉄粒子 (微)
- 9 にぶい黄褐色 10YR5/4 ローム粒子 (中)
- 10 明黄褐色 10YR6/6 ローム粒子 (中)

SD 4 ・ 7 ・ 8

- 1 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (多)
- 2 黒色 10YR2/1 炭化物 (微)
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/4 焼土粒子 (微)
- 4 暗褐色 10YR3/4 焼土粒子・炭化物 (微)
- 5 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (微)
- 6 黒褐色 10YR3/2 ロームブロック (中)
- 7 褐灰色 10YR4/1 ローム粒子 (多) 炭化物 (微)
- 8 にぶい黄褐色 10YR4/3 炭化物 (微)
- 9 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒子 (微) 焼土粒子・炭化物 (少)

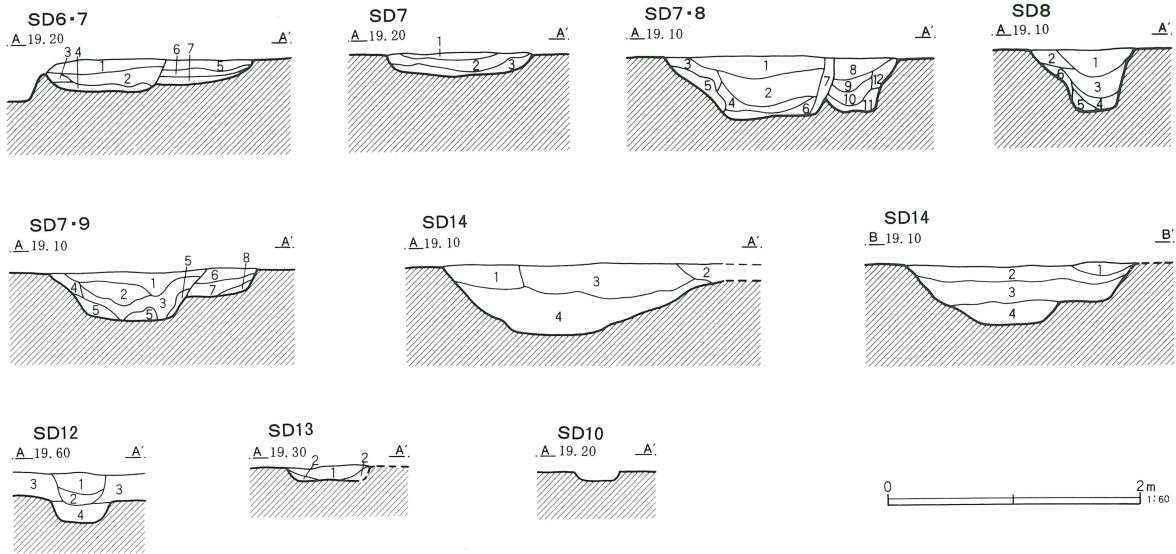
SD 5 ・ 6 (A - A')

- 1 灰黄褐色 10YR5/2 ロームブロック (少) 炭化物 (微)
- 2 灰黄褐色 10YR5/2 ローム粒子 (少)
- 3 褐灰色 10YR5/1 焼土粒子・炭化物 (微)
- 4 褐灰色 10YR5/1 砂質粒子 (多)
- 5 暗褐色 10YR3/4 酸化鉄粒子 (微)
- 6 褐灰色 10YR4/1 焼土粒子・炭化物 (少)
- 7 褐色 10YR4/4 炭化物 (少)
- 8 にぶい黄褐色 10YR6/4 砂質粒子 (多)・炭化物 (微)
- 9 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (多) 焼土粒子 (微)
- 10 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (微)
- 11 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (多)
- 12 黄褐色 10YR5/6 ロームブロック (少)

SD 5 ・ 6 (B - B')

- 1 灰黄褐色 10YR5/2 焼土粒子・炭化物 (微)
- 2 褐灰色 10YR5/1 焼土粒子・炭化物 (微)
- 3 暗褐色 10YR3/4 酸化鉄粒子 (微)
- 4 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (多) 焼土粒子 (微)
- 5 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (微)
- 6 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (多)
- 7 黄褐色 10YR5/6 ロームブロック (少)

第16図 溝 (3)



SD 6・7

- 1 灰黄褐色 10YR5/2 焼土粒子・炭化物 (微)
- 2 褐灰色 10YR5/1 焼土粒子・炭化物 (微)
- 3 暗褐色 10YR3/4 酸化鉄粒子 (微)
- 4 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (多) 焼土粒子 (微)
- 5 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (少)
- 6 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (少)
- 7 にぶい黄褐色 10YR5/4 ローム粒子 (中) 炭化物 (微)

SD 7

- 1 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (少)
- 2 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (少)
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/4 ローム粒子 (中) 炭化物 (微)

SD 7・8

- 1 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (少)
- 2 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (少)
- 3 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子 (中)
- 4 褐灰色 10YR4/1 ローム粒子 (微) 炭化物 (多)
- 5 黄褐色 10YR5/6 炭化物 (微)
- 6 にぶい黄褐色 10YR5/4 ローム粒子 (中) 炭化物 (微)
- 7 黒褐色 7.5YR2/2 灰色粘土粒子 (少) 炭化物 (微)
- 8 黒色 10YR2/1 ローム粒子 (多)
- 9 黒褐色 10YR2/2 ローム粒子 (微)
- 10 黒褐色 10YR2/3 炭化物 (微)
- 11 にぶい黄褐色 10YR5/4 ローム粒子 (多)
- 12 褐色 10YR4/4 ローム粒子 (多)

SD 8

- 1 黒色 10YR2/1 ローム粒子 (多)
- 2 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (中)
- 3 黒褐色 10YR2/2 ローム粒子 (微)
- 4 黒褐色 10YR2/3 炭化物 (微)
- 5 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子・炭化物 (微)
- 6 褐色 10YR4/4 ローム粒子 (多)

SD 7・9

- 1 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (少)
- 2 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (少)
- 3 褐灰色 10YR4/1 ローム粒子 (微) 炭化物 (多)
- 4 黄褐色 10YR5/6 炭化物 (微)
- 5 にぶい黄褐色 10YR5/4 ローム粒子 (中) 炭化物 (微)
- 6 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子・炭化物 (微)
- 7 灰黄褐色 10YR4/2 焼土粒子 (微)
- 8 灰黄褐色 10YR5/2 ローム粒子 (少)

SD 12

- 1 黒褐色 10YR3/2 焼土粒子 (微) 砂質粒子 (多)
- 2 暗褐色 10YR3/4 白色粒子 (少) 砂質ブロック (多)
- 3 褐色 10YR4/4 白色粒子 (中)
- 4 暗褐色 10YR3/3 砂質粒子 (多)

SD 13

- 1 にぶい黄褐色 10YR4/3 焼土粒子 (微) 白色粒子 (中)
- 2 暗褐色 10YR3/4 砂質粒子 (少)

SD 14 (A-A')

- 1 灰黄褐色 10YR6/2 ローム粒子 (少)
- 2 黒褐色 10YR3/2 白色粒子 (多)
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/3 ロームブロック (多)
- 4 暗褐色 10YR3/3 ロームブロック (少)

SD 14 (B-B')

- 1 暗褐色 10YR3/3 ロームブロック (多)
- 2 灰黄褐色 10YR5/2 ローム粒子・炭化粒子 (少)
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (少) 酸化鉄粒子 (多)
- 4 灰黄褐色 10YR4/2 酸化鉄粒子 (多) ロームブロック (少)

恵器甕胴部破片等（第18図1・2）が少量出土したにすぎない。これらの遺物のほとんどは混入と考えられ、開削時期については明確でない。

第8号溝（第14・15・16図）

南側調査区を南西から北東方向に走行する溝で、第1・4・7号溝と重複する。土層断面の観察によれば新旧関係は第1・4号溝より新しく、第7号溝よりも古いことが判明した。規模は幅0.9m、深さ0.5mを測り、断面形は逆台形を呈する。また、第7号溝との交差部分は袋状に底面の幅を広げており、水溜め状の施設の可能性も考えられる。

遺物はまったく出土しなかった。

第9号溝（第14・16図）

南側調査区中央北寄り位置する。南北方向に緩やかに蛇行しながら第2号溝と第7号溝を連結し、第4号溝と重複する。土層断面の観察では第7号溝より古く、第4号溝よりも新しいことが判明した。規模は幅0.8m、深さ0.2m、断面形は逆台形を呈する。

遺物はまったく出土しなかった。

第10号溝（第14・16図）

南側調査区の南西端で検出されたL字形に屈曲する小規模な溝で、第2号住居跡、第1号井戸と重複する。土層断面の観察から第2号住居跡より新しく、第1号井戸よりも古いことが確認された。規模は幅0.4m、深さ0.1m、断面形は浅い箱型である。

遺物はまったく出土しなかった。

第11号溝（第14・15図）

南側調査区中央北端に位置し、第1号溝と重複しながら調査区外へ延びる幅広の溝である。土層断面の観察では第1号溝に切られていることが確認された。規模は幅1.5m、深さ0.2mを測る。

遺物はまったく出土しなかった。

第12号溝（第14・16図）

南側調査区南東端に位置し、東西方向に走行する小規模な溝である。西側は攪乱によって壊され、東側は調査区外に延びている。規模は幅0.5m、深さ0.4m、断面形は逆台形を呈する。

遺物はまったく出土しなかった。

第13号溝（第14・16図）

南側調査区東側に位置し、南北方向に走行する。大半が攪乱により壊されていた。規模は幅1.1m、深さ0.1m、断面形は箱型を呈する。

遺物は不明鉄製品（第19図16）のみが出土した。

第14号溝（第14・16図）

北側調査区内で唯一検出された溝で、南北方向に走行し、第5・6号井戸と重複する。南側調査区の溝との関連性については、未調査部分を挟むため明確にし得なかった。規模は幅2.1m、深さ0.5m、断面形は逆台形を呈し、東側にテラス状の平坦面を有する。

出土遺物は須恵器坏底部（第18図5）のみである。

溝出土遺物（第17・18・19図）

第1号溝から出土した遺物を第17図に一括した。

1は瓦堂の屋蓋部破片である。入母屋造りの破風部分で、半截竹管状工具を用いて丸瓦を表現している。降棟、隅棟ともに幅1.2cmほどの隆帯で表し、破風には三角形ないし台形を呈する透孔を開け、沈線で縁取る。内面にヘラケズリを施し、粘土板成形である。土師質焼成で、色調は橙褐色を呈する。胎土は石英、白色粒子、赤色粒子、角閃石等を多量に含む。年代的には美里町東山遺跡出土の瓦堂に細部の表現が酷似していることから8世紀末～9世紀前半に位置づけられる。

2は在地産の鉢である。瓦質で、内外面に煤が付着している。年代は14世紀後半に比定される。

3は山茶碗系の陶器片口鉢の底部破片である。内面は良く使い込まれている。13世紀後半の製品。

4は平瓦で、凹面、凸面ともに離れ砂が付着する。

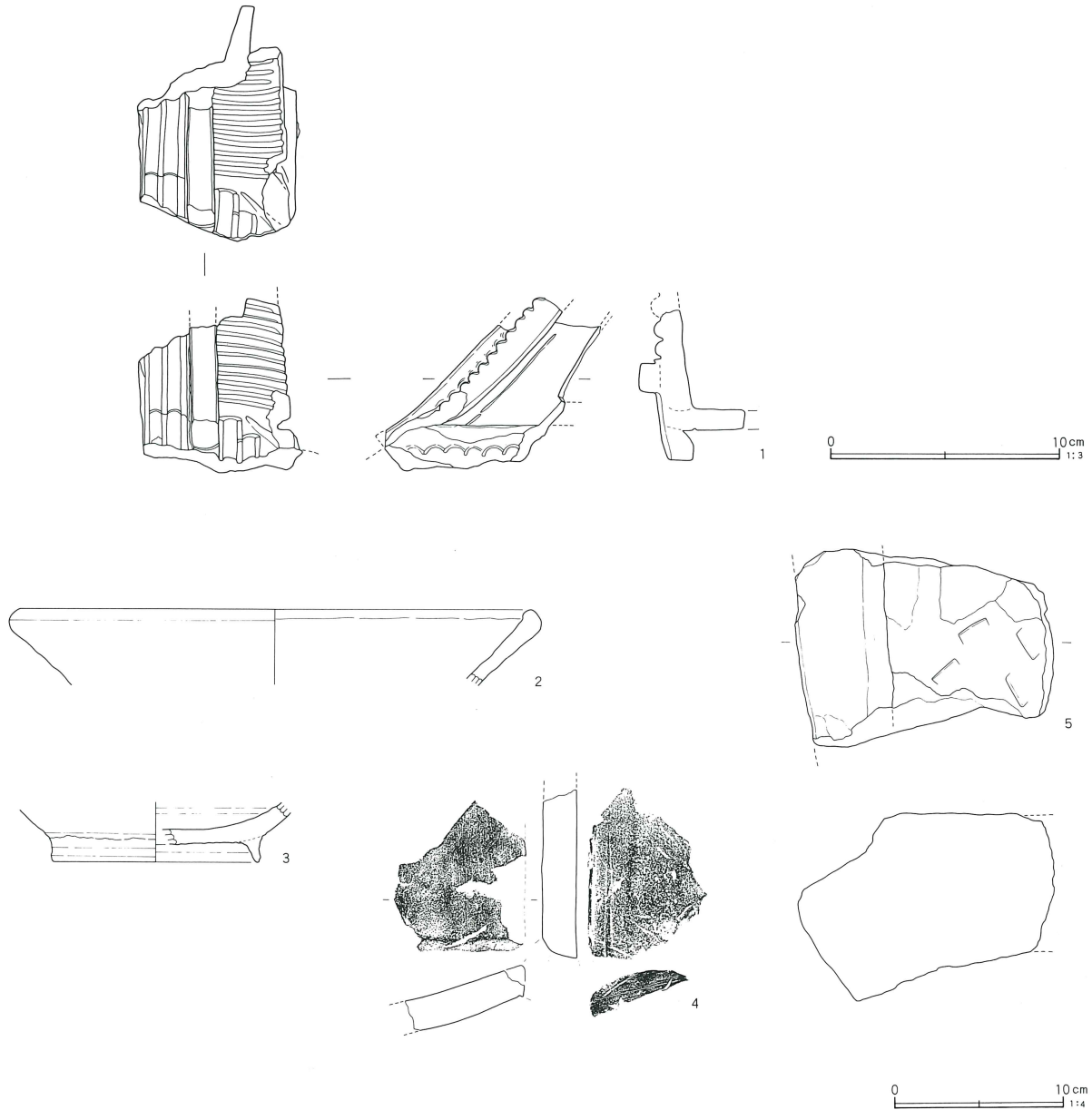
凹面はナデ調整を施す。中世の所産であろう。

5は角閃石安山岩を用いた加工石材である。断面形は屋根形を呈し、上面に刃幅2cmほどの工具痕が明瞭

に残る。長さ11.5cm、幅15.3cm、厚さ10.9cm、重量920g。五輪塔の火輪の可能性も考えられる。

第18・19図に各々の溝から出土した遺物を一括した。

第17図 第1号溝出土遺物



第4表 第1号溝遺物観察表 (第17図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	瓦 堂	(30.0)	4.4	(12.0)	ABEFJ	B	橙褐色	10	屋蓋部破片 土師質焼成
2	在地産鉢		3.5		ABDFJ	C	赤褐色		瓦質 二次火熱 煤付着 14世紀後半
3	陶器鉢		ABDGJ		A	灰色	山茶椀系片口鉢 内面平滑 13世紀後半		
4	平瓦		ABEFJ		B	灰白色	凹面、凸面共離れ砂付着 凹面ナデ調整		
5	加工石材		長さ11.5cm 幅15.3cm 厚さ10.9cm		角閃石安山岩製	上面に工具痕残る 火輪か			

1～3は溝から出土した古墳時代遺物である。1・2は第7号溝から出土したもので、1は須恵器蓋環の坏身を模倣した土師器坏で、鬼高II式の6世紀後半代に比定される。2は須恵器甕の胴部破片である。3は第5号溝出土の須恵器甕の口縁部破片である。外面に櫛描波状文を二段施文する。これらは小片であることから遺構に伴う遺物ではなく、混入と考えられる。

4・5は平安時代の遺物である。4は第2号溝出土の須恵器甕口縁部である。5は第14号溝から出土した須恵器坏の底部である。

6～12は中世以降の遺物を一括した。6～8は第4号溝から出土した。6は平瓦で、凹面、凸面ともに糸切り痕を残し、離れ砂が付着する。7は古瀬戸の播鉢で、内外面とも鉄釉が掛かる。15世紀後半に比定され

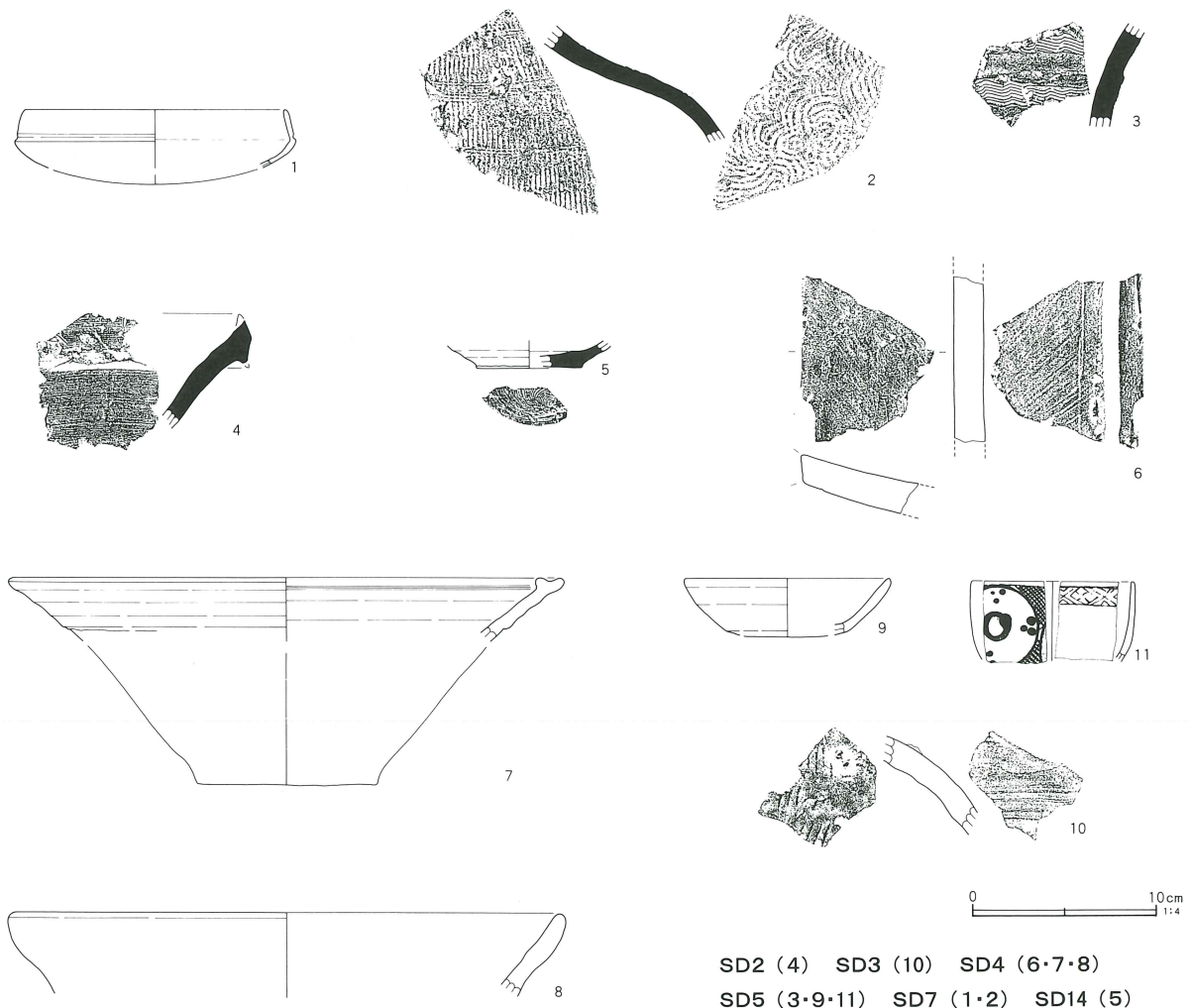
る。8は在地産の鉢で、瓦質である。14世紀後半に比定される。

9は第5号溝から出土した在地産土師質皿で、底部を欠損する。10は第3号溝から出土した渥美産の陶器甕の破片である。

11・12は第5号溝出土の近世遺物である。11は肥前系の染付け磁器碗である。格子目文を地文とした文様で、口縁内には四方禪文を描く。18世紀後半に比定される。12は遺存高3.5cmの陶器瓶のミニチュアである。白色の灰釉が掛かり、底部にはヘラ切り痕を残す。

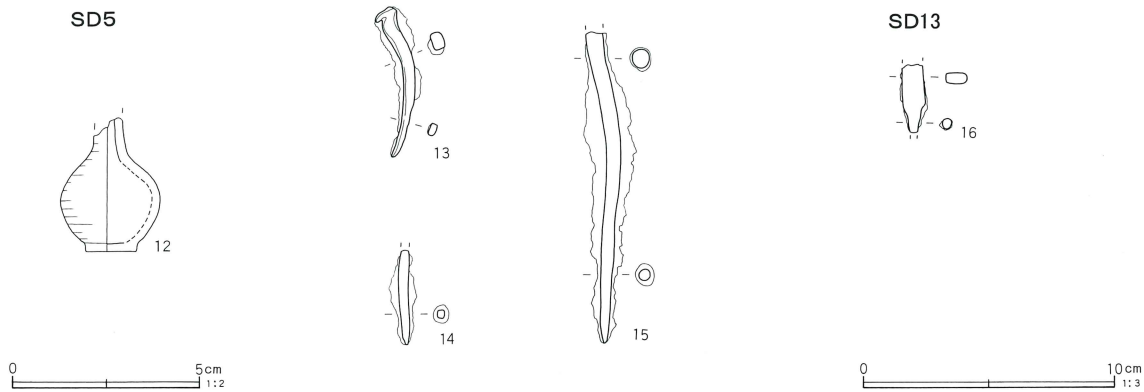
13～16は溝出土の鉄製品を一括した。13～15は第5号溝から出土したもので、13・14は和釘、15は断面円形の棒状鉄製品である。16は第13号溝出土の不明鉄製品で、鉄鎌の篋被部に類似しているが明確でない。

第18図 溝出土遺物 (1)



SD2 (4) SD3 (10) SD4 (6・7・8)
SD5 (3・9・11) SD7 (1・2) SD14 (5)

第19図 溝出土遺物 (2)



第5表 溝遺物観察表 (第18・19図)

挿図番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
第18図1	SD 7	土師器坏	(14.0)	3.1		ABDEF	B	暗褐色	10	須恵器坏身模倣 体部ヘラケズリ
第18図2	SD 7	須恵器甕				BDGJ	A	灰色		外面平行印目後、カキ目 降灰
第18図3	SD 5	須恵器甕				ABDJ	B	暗灰褐色		櫛描波状文二段 末野産か
第18図4	SD 2	須恵器甕				ABGJ	A	暗灰褐色		産地不明
第18図5	SD14	須恵器坏		1.5	(5.8)	ABDJ	A	灰色	30	底部糸切り離し 産地不明
第18図6	SD 4	平瓦				ABEGJ	B	灰白色		凹面、凸面共糸切り痕、離れ砂
第18図7	SD 4	陶器播鉢	(30.0)	3.4		ABG	A	褐色	10	古瀬戸 鉄釉 15世紀後半
第18図8	SD 4	在地产鉢	(29.6)	4.4		ABFGJ	C	灰白色	10	瓦質 14世紀後半
第18図9	SD 5	土師質皿	(11.0)	3.1		ABFJ	C	橙褐色	20	底部欠損
第18図10	SD 3	陶器甕				ABG	A	灰色		渥美産
第18図11	SD 5	磁器碗	(8.6)	4.3		G	A	白色	20	染付 肥前系 18世紀後半
第19図12	SD 5	陶器瓶		3.5	1.3	BG	A	乳白色	95	ミニチュア 灰釉
第19図13	SD 5	鉄釘	長さ5.9cm	断面長方形0.7×0.5cm		重量6.45g				和釘
第19図14	SD 5	鉄釘	長さ3.7cm	断面方形0.3×0.3cm		重量3.57g				釘断片か
第19図15	SD 5	鉄製品	長さ12.3cm	断面円形0.6×0.6cm		重量29.31g				棒状鉄製品 先端尖る 釘断片か
第19図16	SD13	鉄製品	長さ2.7cm	断面長方形0.9×0.4cm		重量2.87g				不明鉄製品

(3) 井戸

井戸は合計6基が検出され、北側調査区内の狭い範囲に5基が集中していた。いずれも素掘りで、井筒等は検出されなかった。遺物は全体に少なく、時期を限定できる資料に恵まれなかったが、第2号井戸からは高さ1mを越す完形の板石塔婆や巴文軒丸瓦などの中世遺物が出土しており、当遺跡における中世の様相を復元する上で貴重な資料が得られた。

第1号井戸 (第20図)

南側調査区南西端のA・B-4グリッドに位置する。第10号溝と重複しており、土層断面の観察では溝を切って掘削されたものと考えられる。

平面形は略円形で、規模は長径1.24m、短径1.06m、

深さ0.96mを測る。断面漏斗状の小型の井戸である。

遺物は土師器、須恵器の小片が出土したのみで、時期については不明である。

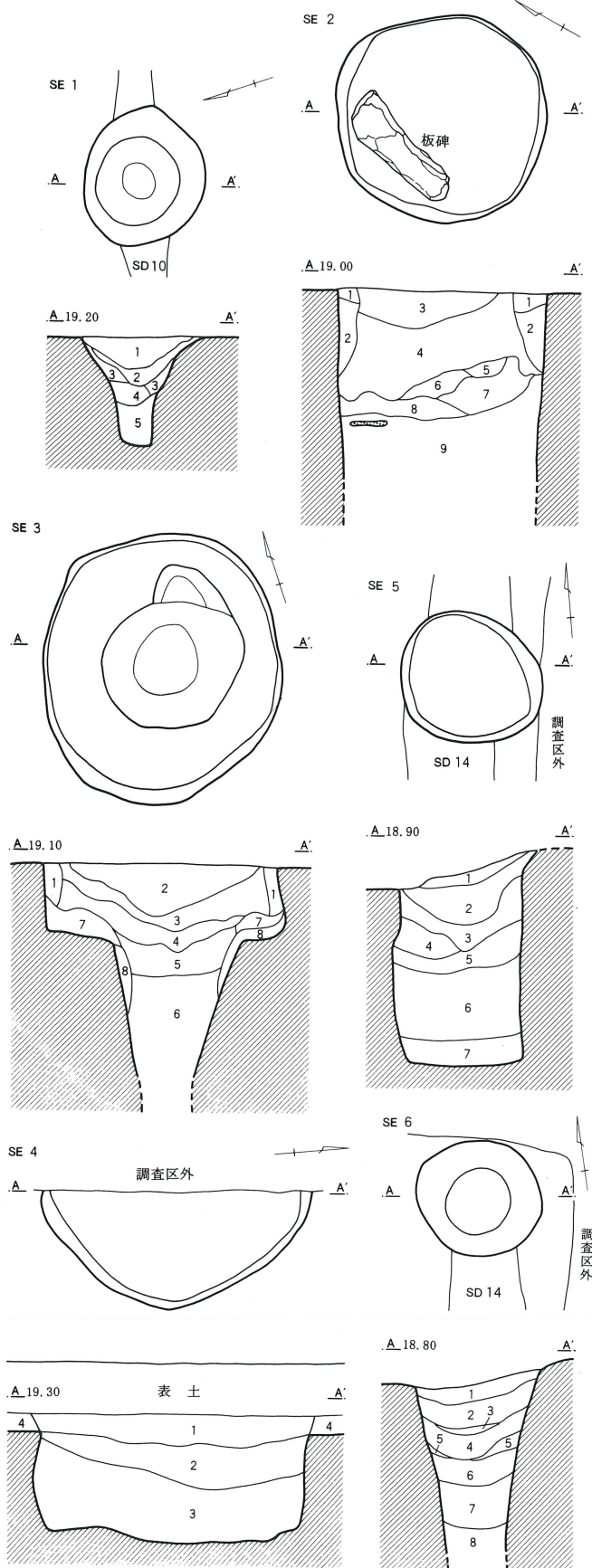
第2号井戸 (第20図)

北側調査区北寄りのB-1グリッドに位置し、東側に第5・6号井戸が隣接する。

平面形は略円形で、長径1.92m、短径1.8mを測る大型のものである。深さは確認面から約2.6mを測り、断面筒状を呈する。

覆土中位から頭部を南に向け、碑面を下にした状態で板石塔婆(第21図1)が出土した。この他に巴文軒丸瓦の瓦当部片1点、角閃石安山岩を使用した加工石材2点(第22図2~4)が出土している。

第20図 井戸



SE 1

- 1 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子(微) 白色粒子(少)
- 2 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子(中)
- 3 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子(多) 焼土粒子(微)
- 4 黒褐色 10YR2/3 ローム粒子(少) マンガン粒子(中)
- 5 暗褐色 10YR3/4 マンガン粒子(中)

SE 2

- 1 にぶい黄褐色 10YR6/3 ローム粒子(多)
- 2 明黄褐色 10YR6/6 ロームブロック(多)
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/3 ローム粒子(多) 焼土粒子(微)
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 炭化粒子(微)
- 5 にぶい黄褐色 10YR4/3 ローム粒子(多) 焼土粒子(微)
- 6 にぶい黄褐色 10YR5/4 ロームブロック(多)
- 7 黄褐色 10YR5/6 酸化鉄粒子(多)
- 8 灰黄褐色 10YR4/2 酸化鉄粒子(多)
- 9 暗緑灰色 7.5GY4/1 酸化鉄粒子(多)

SE 3

- 1 明黄褐色 10YR6/6 ロームブロック(多)
- 2 にぶい黄褐色 10YR4/3 ロームブロック(多)
- 3 褐色 10YR4/4 ローム粒子(多) 焼土粒子(微)
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 ローム粒子(少)
- 5 にぶい黄褐色 10YR6/4 ロームブロック(多)
- 6 明黄褐色 10YR7/6 酸化鉄粒子(多)
- 7 黄褐色 10YR5/6 酸化鉄粒子(多)
- 8 灰黄褐色 10YR4/2 焼土粒子(微) 酸化鉄粒子(多)

SE 4

- 1 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子(多) 炭化粒子(微)
- 2 にぶい黄褐色 10YR4/3 酸化鉄粒子(多)
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/4 酸化鉄粒子(多)
- 4 暗褐色 10YR3/3 白色粒子(少)

SE 5

- 1 にぶい黄褐色 10YR4/3 酸化鉄粒子(多)
- 2 にぶい黄褐色 10YR5/4 酸化鉄粒子(多)
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/4 ロームブロック(多)
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 ローム粒子(少)
- 5 にぶい黄褐色 10YR6/4 ロームブロック(多)
- 6 暗緑灰色 7.5GY4/1 酸化鉄粒子(多)
- 7 緑灰色 10GY6/1 砂質粒子(少)

SE 6

- 1 にぶい黄褐色 10YR4/3 酸化鉄粒子(多)
- 2 にぶい黄褐色 10YR5/4 酸化鉄粒子(多)
- 3 にぶい黄褐色 10YR6/4 灰色粘土ブロック(多)
- 4 にぶい黄褐色 10YR4/3 焼土粒子(微)
- 5 にぶい黄褐色 10YR6/4 ロームブロック(多)
- 6 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子・ロームブロック(多)
- 7 暗緑灰色 7.5GY4/1 酸化鉄粒子(多)
- 8 緑灰色 10GY6/1 砂質粒子(少)

0 2m 1:50

第3号井戸 (第20図)

北側調査区南寄りのB-1グリッドに位置し、西側に第4号井戸が近接する。

平面形は略円形で、規模は長径2.38m、短径2.1m、深さ1.85m以上を測る断面二段掘りの大型の井戸である。下部は北側に足場状の掘り込みをもち、断面漏斗状となる。覆土は大きく8層に区分され、酸化鉄粒子、焼土粒子等の混入がみられた。

覆土から在地産の瓦質鉢1点、角閃石安山岩を利用した加工石材1点(第22図5・6)が出土した。

第4号井戸 (第20図)

北側調査区西寄りのB-1グリッドに位置し、西半分は調査区外にかかっている。

平面形は略円形に近いものと推定される。規模は径2.36m、深さ1.14mの断面筒状の井戸である。覆土は3層に区分され、2・3層はローム土を主体とする。また、4層は井戸構築時の地表面に相当する。

遺物はかわらけの破片があるが、細片のため実測・図示はできなかった。

第5号井戸 (第20図)

北側調査区北東寄りのC-1グリッドに位置し、第14号溝と重複している。

平面形は略円形で、規模は長径1.28m、短径1.1m、深さ1.9mを測る。断面筒状の小型の井戸である。覆土は大きく7層に区分され、3・5層にはロームブロックが多量に含まれていた。

遺物はまったく出土しなかった。

第6号井戸 (第20図)

北側調査区北東端のC-1グリッドに位置し、第14号溝と重複している。

平面形は略円形で、規模は長径1.1m、短径1.0m、深さ1.5m以上を測る。断面漏斗状の小型の井戸である。覆土は大きく8層に区分される。このうち上層の3層には灰色粘土ブロックの混入土がレンズ状に堆積

し、その下層には焼土粒子、ロームブロック等を含む土層が堆積していた。

遺物はまったく出土しなかった。

井戸出土遺物 (第21・22図)

1は第2号井戸から出土した板石塔婆で、ほぼ完存する。高さ113.7cm、上幅29.7cm、下幅38.3cm、基部の厚さ6.9cmを測り、碑面には主尊の阿弥陀如来だけが彫られている。山形の頂部を欠き、二条線は浅く彫り出されている。枠線はなく、基部側に三条の浅い横線が引かれている。碑面は平滑に仕上げられる。種子は阿弥陀如来(キリーク)である。薬研彫りで大きく彫り出されている。裏面は大きな剝離痕と側端の整形痕のみで、工具痕はほとんどみられない。

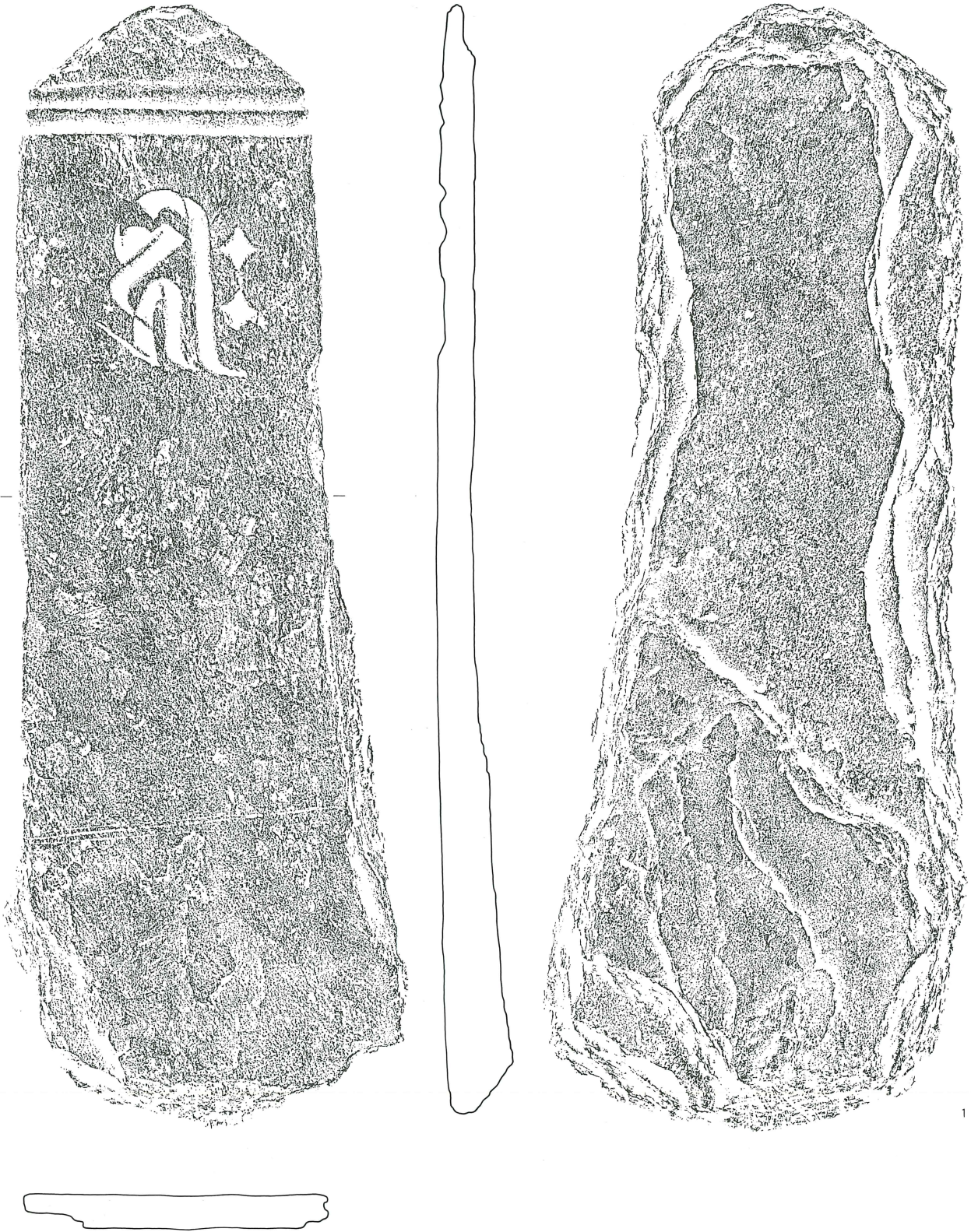
2は第2号井戸から出土した巴文軒丸瓦である。瓦当部全体の約3分の1の破片で、瓦当部径約12.0cmに復元される。巴文の頭の向きは左巻きで、遺存部から想定すると三つ巴文と思われる。巴文の表出はしっかりしたもので、尾は長くのびる。また、尾の部分には中心に向かう範傷がみられる。焼成はやや甘く、色調は褐色である。胎土は砂粒、赤色粒子を多く含む。

この瓦と同様の範傷をもつ軒丸瓦が、玉川村春日神社境内遺跡、嵐山町宮ノ裏遺跡、行司免遺跡等から出土しており、同範瓦の可能性も考えられる。比企地方の中世瓦について詳細な検討を行った石川安司氏の研究によれば、13世紀後半～14世紀前半を中心とした年代に位置づけられていることから、本資料も時期的に近接した14世紀前半頃の所産と考えられる。

3・4は第2号井戸から出土した加工石材である。3の上面には径3.0cm、深さ0.9cmの円形の凹みが彫られている。金属製の工具によって抉られたものと考えられる。長さ13.2cm、幅11.0cm、厚さ7.9cm、重量745gである。4は上面及び両側面に面取りを施した加工石材である。上面には擦痕が観察される。長さ9.9cm、幅9.5cm、厚さ5.3cm、重量300gである。3・4ともに角閃石安山岩を用いたもので、その用途については不明である。

第21図 井戸出土遺物 (I)

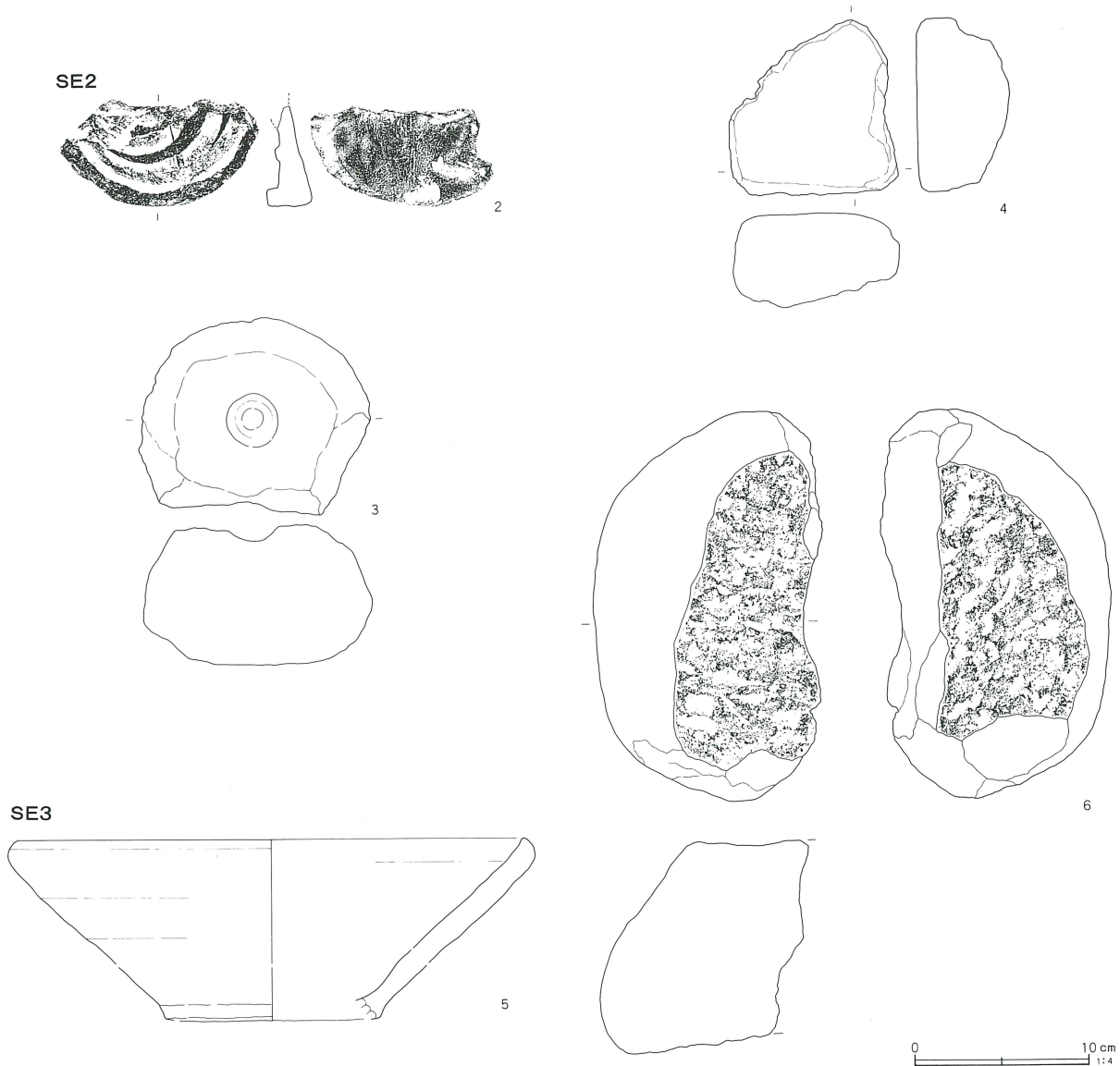
SE2



5は第3号井戸出土の在地産鉢である。口径29.2cm、器高10.3cm、底径12.4cmに復元される。瓦質で、内面は平滑となり良く使い込まれている。体部下半の外面には指頭による押圧痕が残る。13世紀後半から14世紀前半に位置づけられる。

6は第3号井戸出土の加工石材である。上・下面には刃幅2.5cmほどの工具痕が明瞭に残り、平坦に加工されている。長さ22.3cm、幅12.6cm、厚さ12.0cm、重量2,905gである。角閃石安山岩を用いており、五輪塔の火輪の可能性も考えられる。

第22図 井戸出土遺物 (2)



第6表 井戸遺物観察表 (第21・22図)

挿図番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
第22図2	SE2	軒丸瓦				ABDFJ	B	褐色	30	三つ巴文瓦当部破片 範傷あり	
第22図5	SE3	在地産鉢	(29.2)	10.3	(12.4)	ABDEG	A	灰褐色	40	瓦質 13世紀後半～14世紀前半	
第21図1	SE2	板石塔婆	高さ113.7cm 上幅29.7cm 下幅38.3cm 厚さ6.9cm								阿弥陀如来 緑泥片岩製
第22図3	SE2	加工石材	長さ13.2cm 幅11.0cm 厚さ7.9cm				角閃石安山岩製				
第22図4	SE2	加工石材	長さ9.9cm 幅9.5cm 厚さ5.3cm				角閃石安山岩製				
第22図6	SE3	加工石材	長さ22.3cm 幅12.6cm 厚さ12.0cm				角閃石安山岩製				

(4) 土壌

土壌は合計12基が検出され、すべて南側調査区に分布していた。南側調査区内における土壌の分布状況は、東半分の攪乱範囲を除いて、調査区内に散在したあり方を示しており、特に集中するような地点は看取できなかった。ただし、溝と重複するものも多く、機能的に関連性を有する可能性も考えられる。

平面形は円形を中心として、その他に楕円形、長方形、不整形等が認められた。断面形は浅い皿状のもの、壁が垂直に立ち上がる箱形のもの、二段に掘り込まれたものなどがみられた。いずれも少量の遺物しか伴っておらず、具体的な時期・性格等については不明と言わざるを得ないが、覆土等の特徴から、ここでは一応中世以降の所産と捉えておきたい。

なお、各遺構図は第23・24図に示し、各土壌の規模等に関しては第8表にまとめて記した。

第1号土壌 (第23図)

南側調査区北西のB-2グリッドに位置する。第1号溝と重複しており、土層断面の観察の結果、それを切っていることが判明した。

平面形は方形で、規模は長径0.9m、短径0.76m、深さ0.25mを測る。主軸方位はN-85°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は3層に区分され、酸化鉄粒子の混入が目立つ。

遺物はまったく出土しなかった。

第2号土壌 (第23図)

南側調査区西寄りのA・B-3グリッドに位置し、第1号住居跡の南西コーナー部分に重複している。

平面形は楕円形で、規模は長径2.1m、短径1.11m、深さ0.4mを測る。主軸方位はN-88°-Eを指す。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は4層に区分され、上層に焼土粒子、炭化粒子等が混入していた。

遺物は土師器、須恵器片が少量出土しただけで、図示できるものはなかった。

第3号土壌 (第23図)

南側調査区北西のC-2グリッドに位置し、第4号溝と重複している。

平面形は長方形を呈し、規模は長径1.1m、短径0.52m、深さ0.3mをそれぞれ測る。主軸方位はN-7°-Eを指す。底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は5層に区分され、炭化物を微量混入する。

遺物はまったく出土しなかった。

第4号土壌 (第23図)

南側調査区西寄りのC-3グリッドに位置し、第5号溝と重複する。両者の切り合い関係については不明である。南に近接して第5号土壌が所在しており、第5号溝に関連する遺構の可能性も考えられる。

平面形は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.85m、深さ0.1mをそれぞれ測る。主軸方位はN-56°-Eを指す。底面は平坦で、皿状に掘り込まれている。覆土は2層に区分され、微量の焼土粒子が含まれていた。

遺物はまったく出土しなかった。

第5号土壌 (第23図)

南側調査区西寄りのC-3グリッドに位置し、第5号溝と重複する。両者の切り合い関係は明確でない。北側に第4号土壌が近接し、第5号溝に関連する遺構の可能性が考えられる。

平面形は楕円形を呈し、規模は長径0.72m、短径0.6m、深さ0.11mを測る。主軸方位はN-98°-Eを指す。底面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

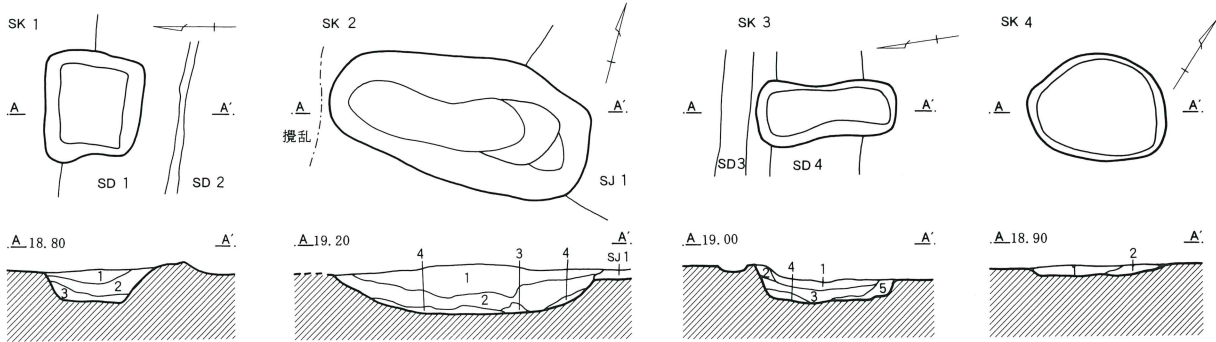
遺物はまったく出土しなかった。

第6号土壌 (第23図)

南側調査区西寄りのB-3グリッドに位置し、南西端にピット193が重複していた。

平面形は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.59mを測る。確認面からの深度は0.1mと浅い。主軸方位はN-35°-Eを指す。底面は概ね平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は3層に区分され、炭化物の混入が

第23図 土壌 (I)



SK 1

- 1 灰黄褐色 10YR4/2 酸化鉄粒子 (多)
- 2 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (微) 酸化鉄粒子 (中)
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (少) 酸化鉄粒子 (多)

SK 2

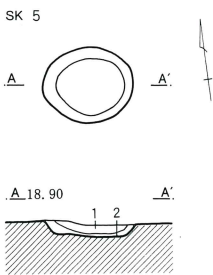
- 1 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子 (少)
- 2 暗褐色 10YR3/3 ローム粒子 (多) マンガン粒子 (中)
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (中) 灰色粘土粒子 (少)
- 4 褐色 10YR4/6 ロームブロック (多)

SK 3

- 1 褐灰色 10YR4/1 炭化粒子 (微)
- 2 灰黄褐色 10YR5/2 酸化鉄粒子 (微)
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 ロームブロック (少)
- 4 黒褐色 10YR3/2 酸化鉄粒子 (微)
- 5 にふい黄橙色 10YR6/4 炭化物 (微)

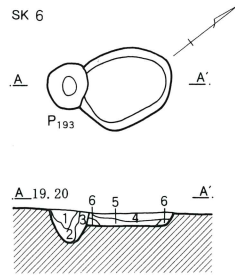
SK 4

- 1 褐色 7.5YR4/4 酸化鉄粒子 (多)
- 2 橙色 7.5YR6/6 焼土粒子 (微) 酸化鉄粒子 (少)



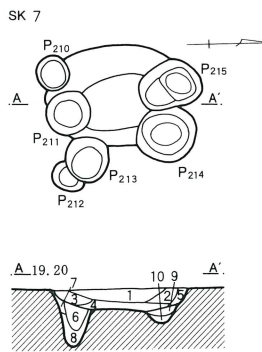
SK 5

- 1 褐灰色 10YR5/1 酸化鉄粒子 (多)
- 2 明黄褐色 10YR7/6 ローム粒子 (多) 酸化鉄粒子 (微)



SK 6

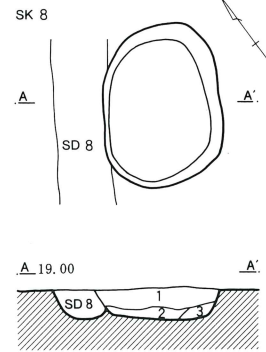
- 1 黒褐色 7.5YR3/1 ローム粒子 (微)
- 2 褐灰色 7.5YR4/1 ローム粒子 (多) 焼土粒子 (少)
- 3 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (多)
- 4 黒褐色 10YR3/1 炭化物 (多)
- 5 黒褐色 10YR3/2 炭化物 (微)
- 6 にふい黄褐色 10YR4/3 ロームブロック (多)



SK 7

SK 7

- 1 黒褐色 7.5YR3/1 焼土粒子 (微)
- 2 黒褐色 7.5YR3/2 炭化物 (少)

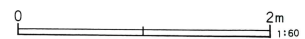


SK 8

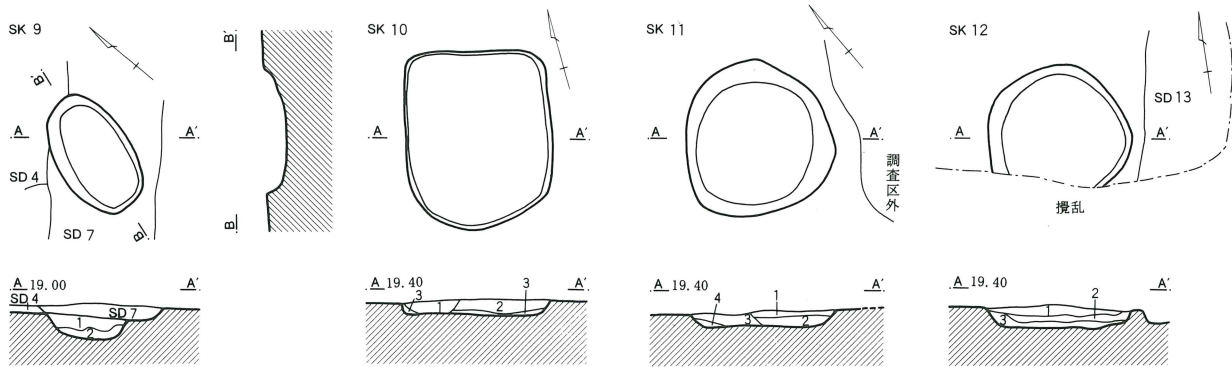
- 3 褐灰色 7.5YR4/1 ローム粒子 (少) 炭化物 (微)
- 4 にふい黄褐色 10YR4/3 ローム粒子 (多)
- 5 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (微)
- 6 黒褐色 7.5YR2/2 ローム粒子 (少) 焼土粒子・炭化物 (多)
- 7 黒褐色 7.5YR3/2 ローム粒子 (少) 炭化物 (微)
- 8 褐色 10YR4/4 ローム粒子 (多)
- 9 黒褐色 10YR3/1 ローム粒子 (微)
- 10 灰黄褐色 10YR4/2 ロームブロック (少)

SK 8

- 1 黒褐色 7.5YR2/2 ローム粒子 (多)
- 2 褐灰色 7.5YR4/1 ロームブロック (多)
- 3 黒褐色 7.5YR3/1 焼土粒子 (微)



第24図 土壌 (2)



SK 9

- 1 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (多) 炭化物 (微)
- 2 明黄褐色 10YR6/6 炭化物 (微)

SK 10

- 1 黒色 10YR2/1 ローム粒子 (少) 炭化物 (微)
- 2 黒褐色 10YR3/2 ローム粒子 (微) 炭化物 (多)
- 3 暗褐色 10YR3/4 焼土粒子 (微)

SK 11

- 1 黒色 10YR1.7/1 ローム粒子 (微)
- 2 黒褐色 10YR2/3 炭化物 (微)
- 3 黒色 10YR2/1 ローム粒子 (微)
- 4 灰黄褐色 10YR4/2 ローム粒子 (多)

SK 12

- 1 黒褐色 10YR2/2 ローム粒子 (中)
- 2 黒褐色 10YR2/2 ローム粒子・ロームブロック (少)
- 3 黒褐色 10YR2/2 ローム粒子・ロームブロック (少)



認められた。

遺物の出土はまったくなかった。

第7号土壌 (第23図)

南側調査区西寄りのB-3グリッドに位置する。5基のピットと重複しており、土層断面の観察ではピットをすべて切って構築していた。

平面形は楕円形で、規模は長径1.05m、短径0.8mの小規模なものである。確認面からの深度は0.15mで、主軸方位はN-5°-Wを指す。底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。

遺物はまったく出土しなかった。

第8号土壌 (第23図)

南側調査区中央部北寄りのE-3グリッドに位置する。南北に走行する第8号溝に接し、土層断面の観察の結果、それを切っていることが判明した。

平面形は楕円形で、規模は長径1.31m、短径0.92m、

深さ0.26mをそれぞれ測る。主軸方位はN-36°-Eを指す。掘り込みは浅く、底面はほぼ平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は3層に区分され、ロームブロック、焼土粒子の混入が認められた。

遺物は平安時代の土師器環 (第25図1) が出土しているが、小片のため混入と考えられる。

第9号土壌 (第24図)

南側調査区中央部北寄りのE-3グリッドに位置する。第4・7号溝が合流する地点に重複しており、土層断面の観察から溝よりも古いことが判明した。

平面形は楕円形で、規模は長径0.97m、短径0.61mの小規模なものである。溝底面からの深度は0.17mを測り、主軸方位はN-18°-Eを指す。底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は2層に区分され、微量の炭化物を混入していた。

遺物はまったく出土しなかった。

第10号土壙（第24図）

南側調査区北東端のF-3グリッドに位置し、南側に第1号溝が近接する。

平面形は南辺が緩く張り出した方形を呈する。規模は長径1.42m、短径1.16m、深さ0.13mをそれぞれ測る。主軸方位はN-12°-Eを指す。掘り込みは全体に浅く、底面は概ね平坦である。壁は緩やかに立ち上がる。覆土は3層に区分され、炭化物、焼土粒子の混入が認められた。

遺物は土師器片が少量出土したが、実測・図示できるものはなかった。

第11号土壙（第24図）

南側調査区北東端のF-3グリッドに位置し、東側に第5号住居跡が近接する。

平面形は円形を呈し、規模は長径1.23m、短径1.16mを測る。確認面からの深度は0.13mで、掘り込みは浅い。底面は概ね平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は4層に区分され、2層に微量の炭化物の混入がみられた。

遺物はまったく出土しなかった。

第12号土壙（第24図）

南側調査区中央部南寄りのD-4グリッドに位置し、第13号溝の西側に接している。

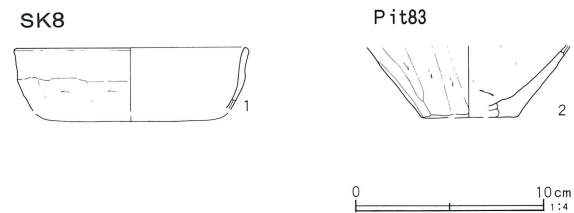
攪乱によって南端は壊されているが、平面形は円形を呈し、規模は長径1.15m、短径1.08m、深さ0.18mをそれぞれ測る。掘り込みは浅く、底面は概ね平坦で、壁は急角度で立ち上がる。覆土は3層に区分され、自然堆積を示していた。

遺物はまったく出土しなかった。

土壙出土遺物（第25図）

1は第8号土壙から出土した土師器坏の破片である。底部を欠損しているが、体部のヘラケズリの特徴から平底形態の北武蔵型坏に還元される。9世紀前半の所産であろう。小片であることから遺構に伴うものではなく、混入の可能性が高い。

第25図 土壙・ピット出土遺物



第7表 土壙・ピット遺物観察表（第25図）

挿図番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
第25図1	SK8	土師器坏	(12.2)	3.3		B E F H	A	赤褐色	10	北武蔵型坏
第25図2	Pit83	土師器甕		3.8	(5.0)	A B E F J	A	褐色	30	外面焼土付着 (旧番号SK13)

第8表 土壙一覧表

番号	位置	形態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	主軸方位	挿図番号	備考
1	B-2	方形	0.90	0.76	0.25	N-85°-W	第23図	S D 1 と重複
2	A・B-3	楕円形	2.10	1.11	0.40	N-88°-E	第23図	S J 1 と重複 土師器・須恵器片
3	C-2	長方形	1.10	0.52	0.30	N-7°-E	第23図	S D 4 と重複
4	C-3	楕円形	1.12	0.85	0.10	N-56°-E	第23図	S D 5 と重複
5	C-3	楕円形	0.72	0.60	0.11	N-98°-E	第23図	S D 5 と重複
6	B-3	楕円形	0.75	0.59	0.10	N-35°-E	第23図	ピット193と重複
7	B-3	楕円形	1.05	0.80	0.15	N-5°-W	第23図	ピット210・211・213~215と重複
8	E-3	楕円形	1.31	0.92	0.26	N-36°-E	第23図	S D 8 と重複 土師器片
9	E-3	楕円形	0.97	0.61	0.17	N-18°-E	第24図	S D 4・7 と重複
10	F-3	方形	1.42	1.16	0.13	N-12°-E	第24図	土師器片
11	F-3	円形	1.23	1.16	0.13	-	第24図	
12	D-4	円形	1.15	1.08	0.18	-	第24図	一部調査区外

(5) ピット群

今回の調査では249基におよぶ多数のピットが検出された。

ここでピットと称したものは、掘立柱建物跡や柵列などのように規則的な配置をもたない、直径50cm前後の小穴を指している。遺物を伴わないことが多いため所産時期については不明瞭であるが、覆土の状況等から中世以降に属するものが多数含まれているものと想定される。

ピットの平面形態は、円形または楕円形を呈するものが主体を占めている。規模は直径16~74cm、深さは5~67cmと大きさは様々であるが、直径は20~40cmの間に80%以上が、深度は10~20cmの間に50%が集中し、概して掘り込みが浅い傾向が窺われた。

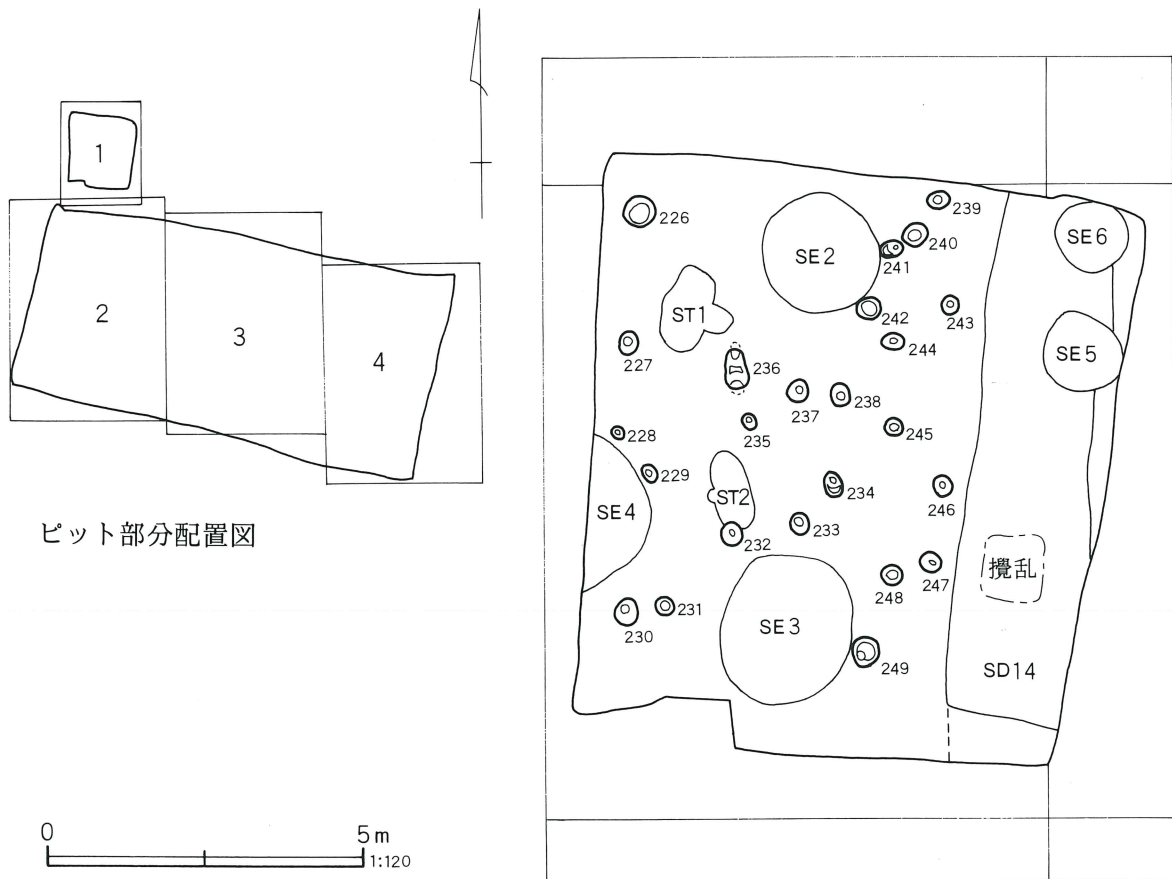
分布状況は、攪乱の著しい南側調査区東半部では稀薄であったが、調査区全体に散在したあり方を示し、

特に集中箇所などは認められなかった。比較的集中する範囲として、南側調査区西寄りのB-3・4グリッド周辺に80基前後が集中しており、中には重複するものや、部分的に柵列状に数基のピットが直線に並ぶものなども確認されている。しかし、周辺におけるピット間の関連性は全体に稀薄で、積極的に掘立柱建物跡や柵列を想定することのできるようなものは見出すことができなかった。また、土層断面の観察でも明瞭な柱痕等の観察できるものはなかった。

ほとんどのピットから遺物は出土しておらず、所産時期を示すようなものがなく、時期及び性格について特定することはできなかった。わずかに第83号ピットから平安時代の土師器甕の底部片(第25図2)が出土しているが、混入の可能性が強い。

なお、各遺構図は第26~29図に示し、各ピットの規模等に関しては第9表にまとめて記した。

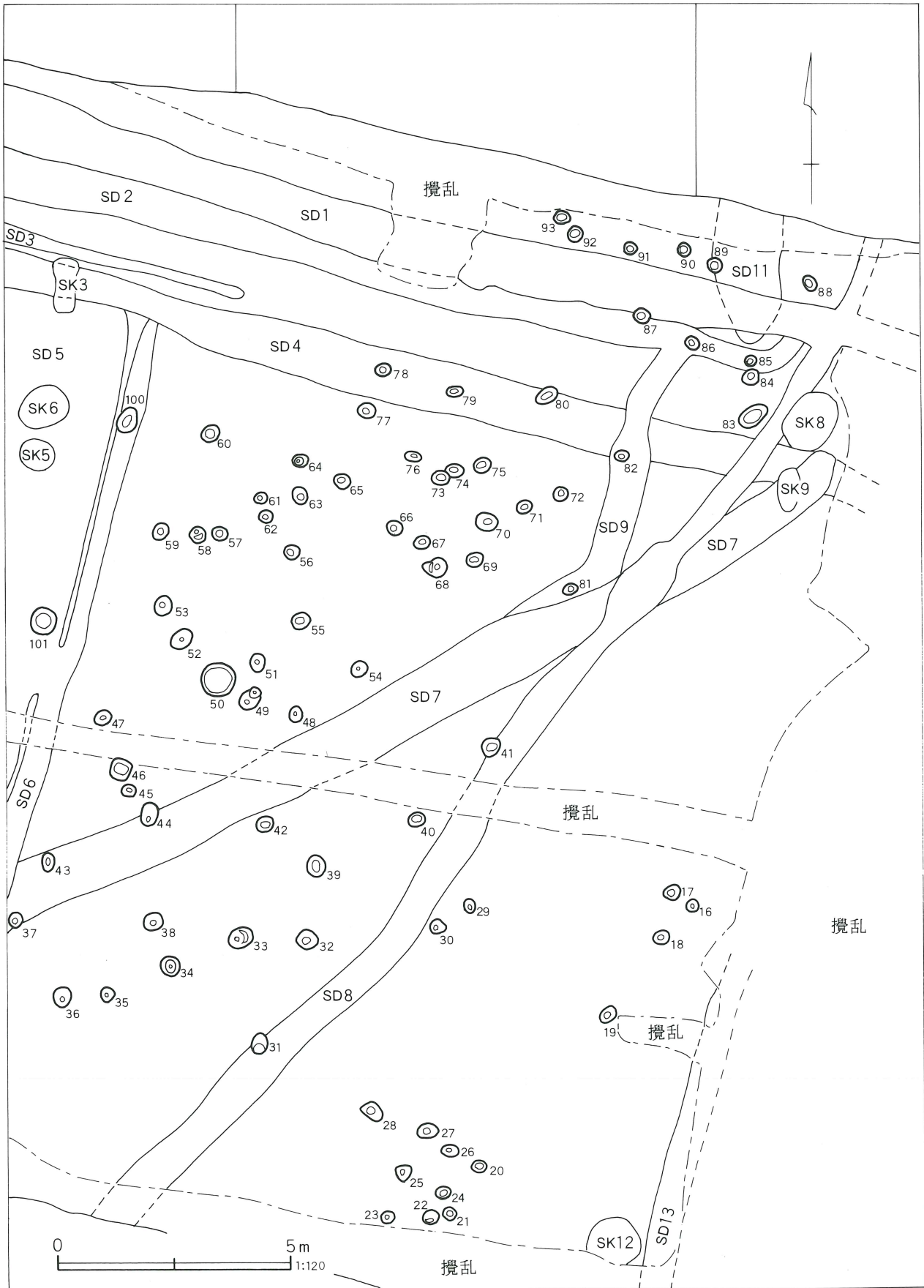
第26図 ピット (I)



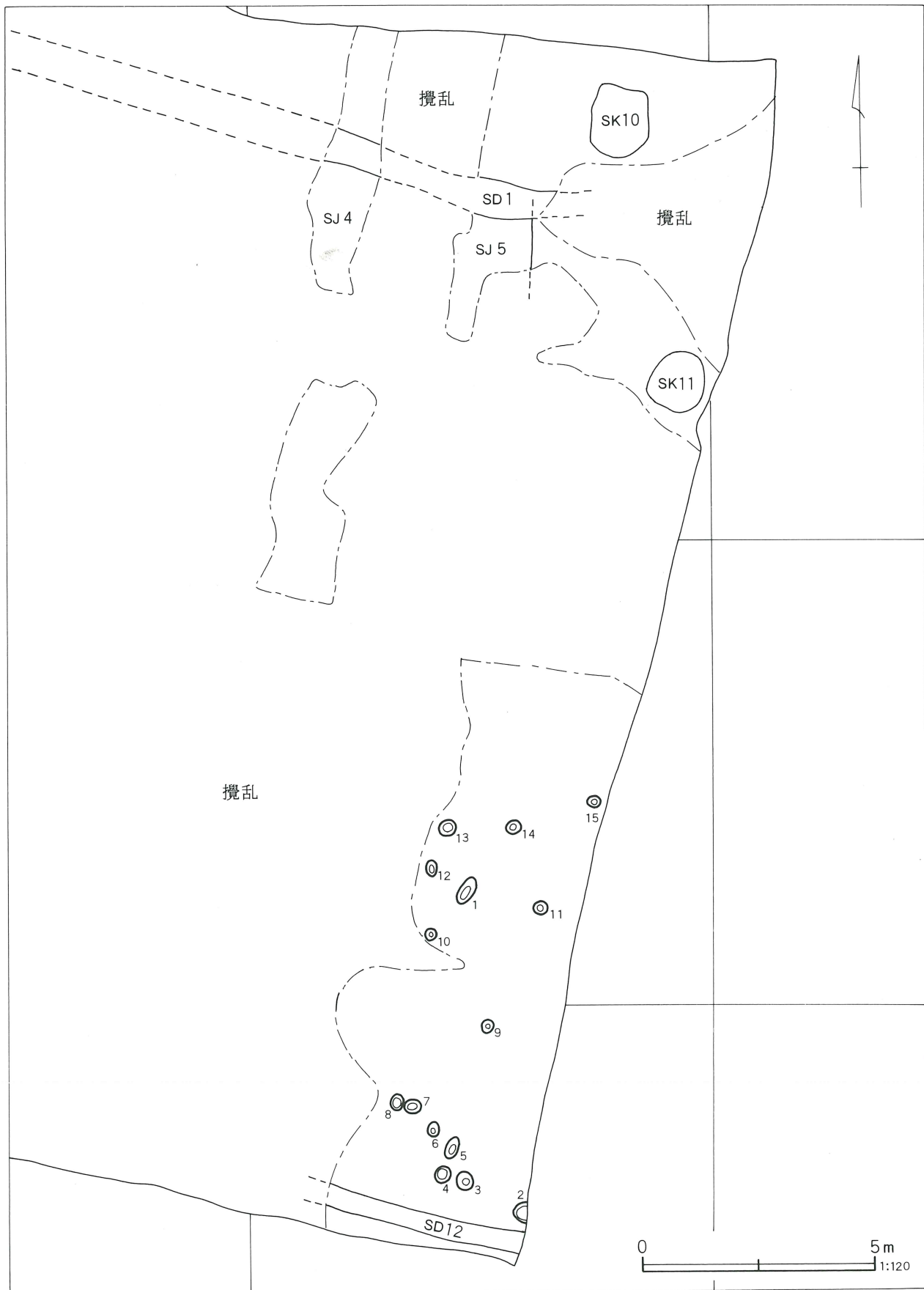
第27図 ピット (2)



第28図 ピット (3)



第29図 ピット (4)



第9表 ピット一覧表

番 号	位 置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	F-4	52	26	31
2	F-5	46	—	34
3	F-5	34	28	33
4	F-5	32	28	20
5	F-5	34	22	15
6	F-5	26	20	18
7	F-5	28	26	18
8	F-5	22	20	29
9	F-5	20	18	10
10	F-4	28	24	14
11	F-4	28	26	20
12	F-4	32	22	17
13	F-4	32	28	18
14	F-4	20	18	12
15	F-4	22	18	15
16	D-4	18	16	9
17	D-4	26	22	14
18	D-4	30	26	26
19	D-4	28	24	20
20	D-4	22	22	9
21	D-4	26	26	9
22	D-4	28	28	19
23	D-4	20	16	17
24	D-4	28	24	14
25	D-4	36	28	16
26	D-4	34	30	23
27	D-4	38	34	25
28	D-4	42	32	31
29	D-4	22	18	19
30	D-4	28	24	24
31	D-4	42	26	24
32	D-4	42	38	16
33	C・D-4	36	30	36
34	C-4	42	34	25
35	C-4	24	24	14
36	C-4	38	36	22
37	C-4	24	24	12
38	C-4	36	30	22
39	D-4	44	38	22
40	D-3	30	26	34
41	D-3	38	—	36
42	D-3	38	36	21
43	C-4	32	22	40
44	C-3	46	36	67
45	C-3	28	26	19
46	C-3	44	42	17
47	C-3	30	26	24
48	D-3	28	26	30
49	D-3	42	36	22
50	C-3	74	70	5
51	D-3	28	24	8
52	C-3	40	32	27
53	C-3	36	32	24
54	D-3	24	24	14

番 号	位 置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
55	D-3	30	30	5
56	D-3	22	22	19
57	C-3	28	26	16
58	C-3	26	24	15
59	C-3	34	30	10
60	C-3	30	28	15
61	D-3	18	16	12
62	D-3	28	26	15
63	D-3	30	30	18
64	D-3	26	26	12
65	D-3	34	34	17
66	D-3	20	20	14
67	D-3	26	22	12
68	D-3	38	32	24
69	D-3	26	24	24
70	D-3	38	32	12
71	D-3	26	26	20
72	D-3	26	26	35
73	D-3	32	26	23
74	D-3	30	26	20
75	D-3	34	30	17
76	D-3	30	14	23
77	D-3	28	24	25
78	D-2	24	24	18
79	D-3	38	20	11
80	D-3	40	26	11
81	D-3	26	26	20
82	D-3	24	20	16
83	E-3	60	44	10
84	E-2・3	36	34	18
85	E-2	20	18	14
86	D-2	28	28	12
87	D-2	40	30	39
88	E-2	26	20	13
89	E-2	26	24	9
90	D-2	28	26	15
91	D-2	18	18	9
92	D-2	24	22	14
93	D-2	28	22	22
94	C-2	32	30	20
95	C-2	34	28	21
96	C-2	36	30	20
97	B-2	42	28	9
98	B-2	24	24	18
99	B-2	26	—	15
100	C-3	54	48	20
101	C-3	50	48	59
102	C-2・3	30	28	17
103	C-2	20	18	10
104	C-2	42	32	19
105	C-2	34	28	25
106	C-2	64	46	29
107	B・C-2	32	32	26
108	B-2・3	36	34	26

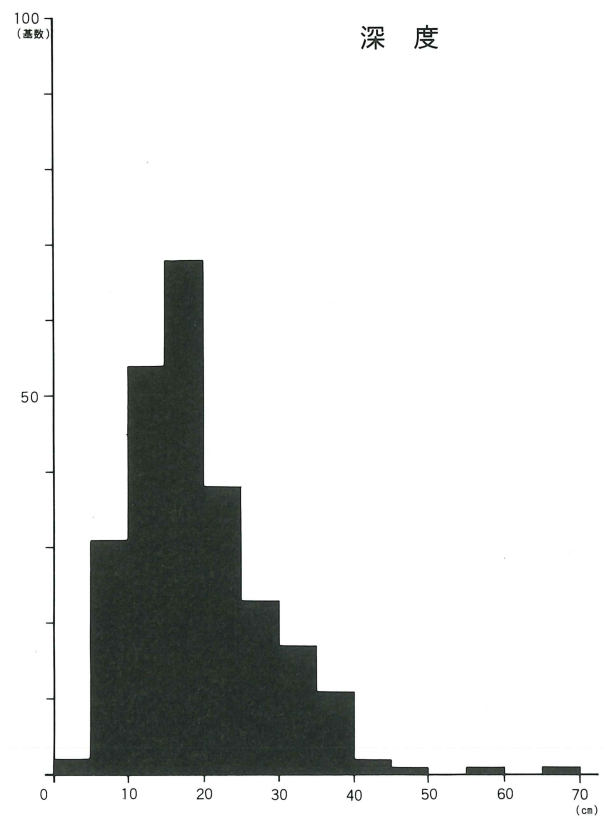
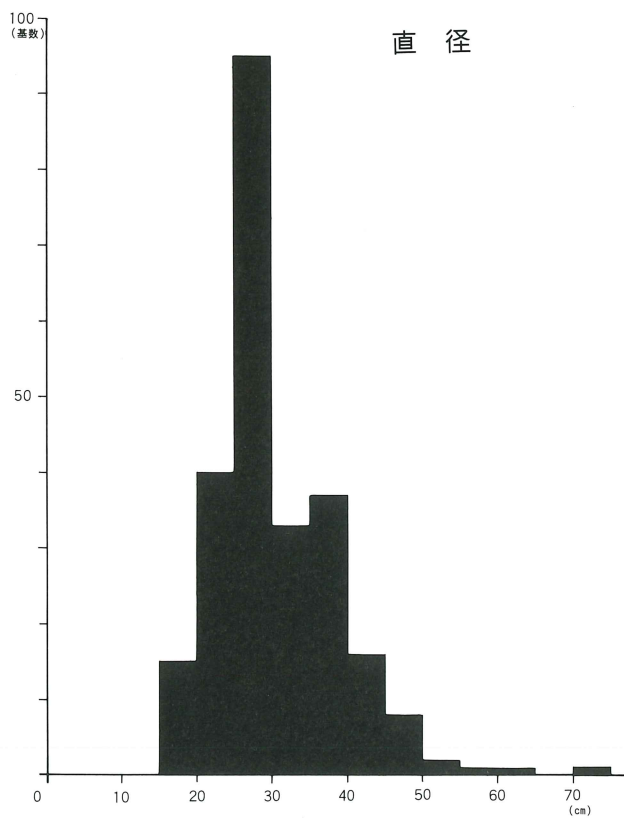
番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
109	B-3	44	30	22
110	B-3	28	28	22
111	B・C-3	30	28	28
112	B-3	44	38	32
113	B-3	34	30	33
114	B-3	28	22	29
115	B・C-3	28	26	19
116	C-3	36	32	34
117	C-3	34	34	18
118	C-3	28	24	16
119	C-3	28	24	18
120	C-3	26	22	21
121	C-3	30	26	20
122	C-3	36	32	33
123	C-3	32	28	15
124	C-3	44	32	23
125	C-3	30	24	17
126	C-3	42	38	17
127	C-3	24	24	16
128	C-3	24	24	15
129	C-3	28	26	12
130	C-3	36	32	35
131	C-3	34	28	25
132	C-3	26	24	28
133	B・C-3	32	32	10
134	B-3	38	30	39
135	C-3	26	22	16
136	C-3	24	24	12
137	B・C-3	38	34	16
138	B-3	28	28	40
139	B-3	32	30	34
140	B-3	32	28	30
141	B-4	32	24	10
142	B-4	32	28	10
143	B-4	28	26	14
144	B-4	32	32	17
145	B-4	30	30	16
146	B-4	32	32	17
147	B-4	30	26	21
148	B-4	30	26	21
149	B-4	44	38	33
150	B-4	28	26	16
151	B-4	32	28	18
152	C-4	30	30	36
153	C-4	24	22	20
154	B-4	30	30	16
155	C-4	30	26	20
156	C-4	22	20	15
157	C-4	26	26	19
158	C-4	50	44	8
159	B-4	22	20	39
160	B-4	22	22	30
161	B-4	26	24	18
162	B-4	24	24	24

番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
163	B-4	26	26	24
164	B-4	38	26	13
165	B-4	24	24	7
166	B-4	36	32	10
167	B-4	22	18	9
168	A-4	30	24	10
169	A-3・4	30	28	18
170	A-3	24	22	10
171	A-3	28	28	13
172	A-3	24	24	11
173	A-3	18	18	14
174	A-3	28	24	13
175	A-3	28	22	20
176	A・B-3	24	24	16
177	B-3	24	24	12
178	B-3	24	24	11
179	A・B-3	30	22	25
180	A-3	26	22	18
181	A・B-3	26	26	9
182	A-3・4	24	24	13
183	B-4	32	28	10
184	B-4	26	26	11
185	B-3・4	36	26	22
186	B-3	30	28	27
187	B-3	36	30	27
188	B-3	22	22	7
189	B-3	22	22	10
190	B-3	34	—	19
191	B-3	24	24	18
192	B-3	36	34	22
193	B-3	36	32	29
194	B-3	40	38	34
195	B-3	24	24	12
196	B-3	30	28	27
197	A-3	28	26	10
198	B-3	30	30	11
199	B-3	30	30	23
200	B-3	26	26	14
201	B-3	34	26	33
202	B-3	48	40	21
203	B-3	30	30	17
204	B-3	24	18	13
205	B-3	26	26	15
206	B-3	34	32	15
207	B-3	20	20	10
208	B-3	38	34	14
209	B-3	24	20	18
210	B-3	28	26	22
211	B-3	36	32	46
212	B-3	28	20	19
213	B-3	36	36	38
214	B-3	50	40	29
215	B-3	50	36	27
216	B-3	24	22	19

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
217	B-3	40	36	20
218	B-3	38	30	17
219	B-3	24	22	15
220	B-3	30	22	18
221	B-3	30	30	23
222	B-3	38	34	29
223	B-3	26	24	29
224	B-3	26	24	39
225	B-3	30	—	42
226	B-1	46	46	23
227	B-1	24	24	15
228	B-1	16	16	10
229	B-1	26	26	14
230	B-1	36	36	38
231	B-1	18	18	9
232	B-1	26	24	18
233	B-1	24	20	10

番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
234	B-1	28	24	11
235	B-1	20	20	7
236	B-1	44	30	32
237	B-1	30	30	27
238	B-1	30	24	45
239	B-1	28	22	15
240	B-1	32	28	10
241	B-1	34	24	32
242	B-1	40	34	24
243	B-1	18	18	18
244	B-1	24	22	17
245	B-1	28	22	17
246	B-1	24	24	29
247	B-1	26	24	26
248	B-1	30	28	15
249	B-1	44	38	15

第30図 ピットの規模



4. その他の遺物

遺構外出土遺物として奈良・平安時代の須恵器環・甕、中世以降に属する平瓦、陶器、砥石等(第31図)が出土している。

1は底部に二次調整の全面回転ヘラケズリを施す須恵器環の底部破片である。底径8.0cmに復元される。ロクロの回転方向は左回転。胎土に白色針状物質を含む南比企窯跡群の製品である。年代的には8世紀後半に位置づけられる。

2は須恵器甕の胴部破片である。外面に平行叩目、内面に同心円文当具痕が残る。焼成は良好堅緻で、色調は灰色である。胎土は白色粒子、砂粒を多量に含む。所産時期は明確でない。

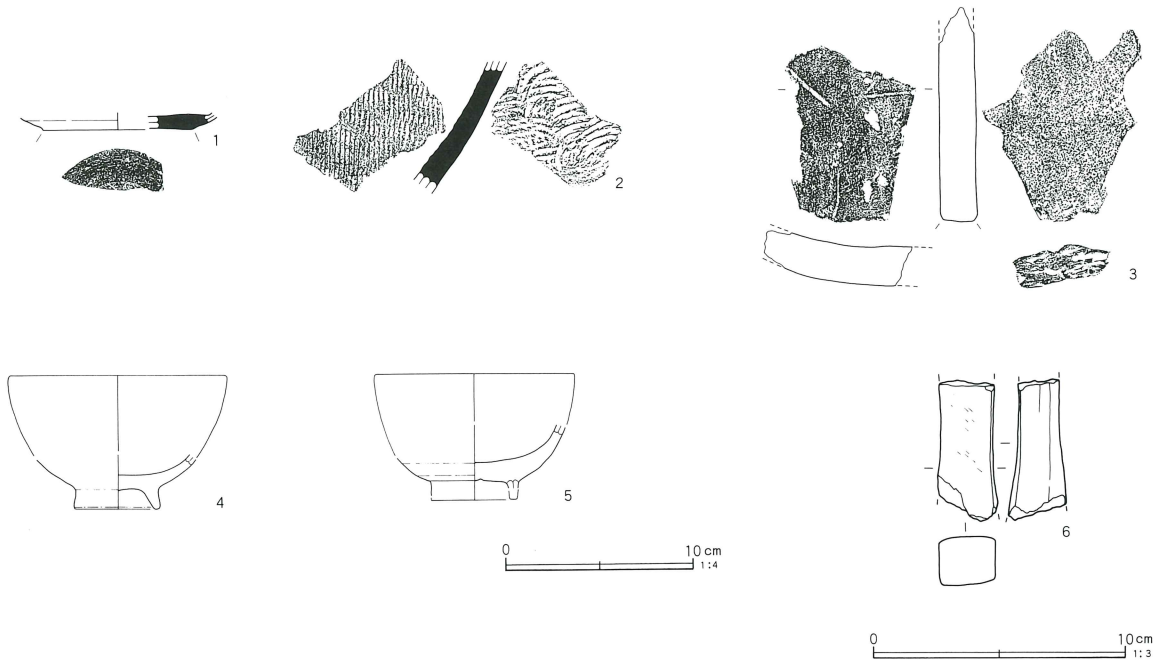
3は平瓦の破片である。焼成はやや軟質で、色調は灰白色を呈する。凹面はナデ調整を施し、凸面は離れ砂が多量に付着する。溝から出土した平瓦と共通した特徴を示しており、中世の所産と考えられる。

4は唐津系の京焼写しの陶器碗である。高台にも施釉を施す。17世紀後半の製品であろう。

5は瀬戸美濃系の長石釉を刷毛塗りした陶器碗である。高台にも施釉を施す。18世紀後半～19世紀初頭の製品と考えられる。

6は凝灰岩製の砥石で、上下端を欠損する。各面とも良く研磨されており、わずかに擦痕が残る。遺存長さ5.6cm、幅2.4cm、厚さ2.3cm、重量42.48g。

第31図 グリッド出土遺物



第10表 グリッド遺物観察表(第31図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器環		0.9	(8.0)	A B C G J	A	灰白色	40	表採 底部全面ヘラケズリ二次調整 南比企産
2	須恵器甕				B D G J	A	灰色		表採 外面平行叩目 内面同心円文当具痕
3	平瓦				A B E G J	B	灰白色		表採 凹面ナデ調整 凸面離れ砂付着
4	陶器碗		2.9	4.5	B G	A	乳白色	80	表採 高台施釉
5	陶器碗		3.8	(4.6)	B J	A	橙褐色	60	表採 刷毛目 高台施釉
6	砥石	長さ5.6cm	幅2.4cm	厚さ2.3cm	重量42.48g				表採 凝灰岩製